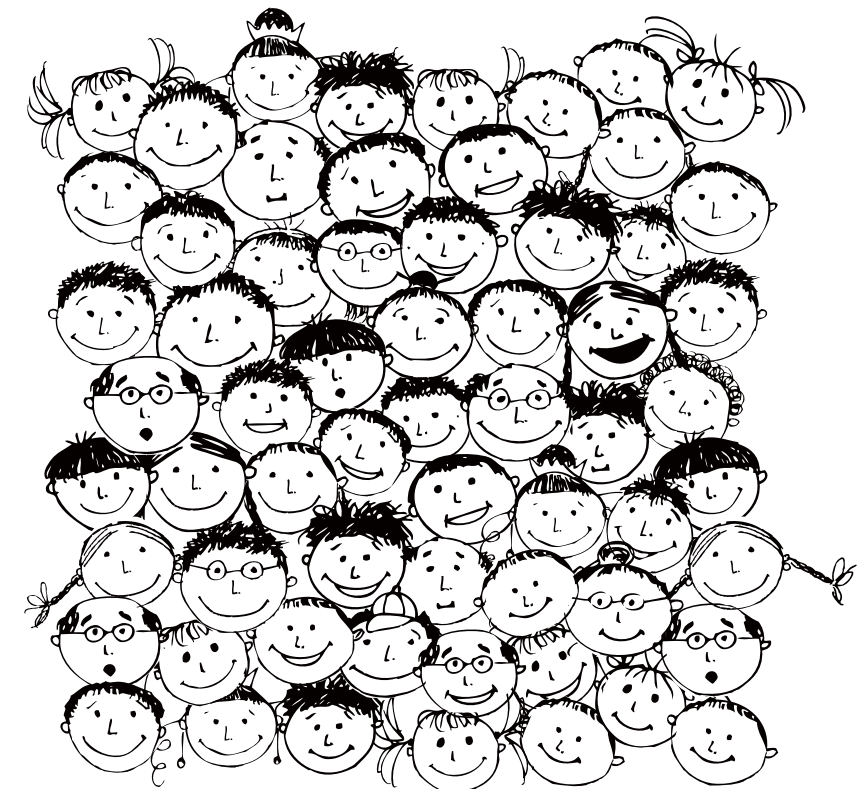


ミュージアムを中心とした 地域の多文化共生プロジェクト報告書

2021



たまろくミュージアム多文化共生推進実行委員会

2021

目次

はじめに	…	1
1. 事業概要	…	3
2. 多文化共生の取り組み実態調査		
2-1 調査概要	…	9
2-2 東京都内の自治体の多文化共生の取り組み実態調査		
2-2-1 一般社団法人港区国際交流協会	…	10
2-2-2 世田谷区教育委員会	…	12
2-3 外国人による多摩六都科学館モニター調査	…	14
2-4 圏域 5 市の在住外国人の実態調査及び分析		
2-4-1 小平市	…	16
2-4-2 東村山市	…	18
2-4-3 清瀬市	…	20
2-4-4 東久留米市	…	22
2-4-5 西東京市	…	24
2-4-6 圏域 5 市調査結果一覧	…	26
3. 科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備		
3-1 多言語ガイドブック（日中・日韓版）	…	29
3-2 学校団体利用向けワークシート・見どころマップの多言語化		
3-2-1 ワークシート（やさしい日本語、英語、中国語、韓国語）	…	30
3-2-2 見どころマップ（やさしい日本語、英語、中国語、韓国語）	…	32
3-2-3 広報	…	34
4. 地域在住外国人向けの特別プログラムの企画開発・実践・評価		
4-1 プログラム A：やさしい日本語によるプラネタリウム解説	…	36
4-2 プログラム B：やさしい日本語で解説する野外観察会	…	38
4-3 プログラム C：やさしい日本語による理科学習支援実験プログラム	…	41
おわりに	…	43

はじめに

1. 本報告書は、たまろく多文化共生推進委員会が、令和3年度文化芸術振興費補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」の助成を受け行っている「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト」の調査および事業の報告である。

2. 本プロジェクトの背景および目的を以下に記す。

日本の外国人登録者数は2013年以降年々増加していると言われている。コロナ禍であっても大幅な減少とはなっておらず、出入国在留管理庁による調査では285万9,584人とされており(2021年6月末現在)、この数は日本の総人口の約2%にあたる。2019年4月に施行された「出入国管理及び難民認定法」により、外国人労働者の受入れが拡大された。我が国における外国人居住者支援の取り組みは、これまでも各地方自治体における多文化共生プランの策定、またそれらに基づいた事業が展開され、外国人居住者が通常の生活を送るための各種手続支援、日本語学習機会の提供、防災教育、地域住民との交流機会創出などが行われているが、公教育の現場での支援は十分とは言えない状況にある。

ここ近年、博物館においても東京オリンピックを照準としたインバウンド対応が進み、広報媒体を中心に多言語化が進められてきた。また、展示解説についてもICTによる多言語化や外国語を話すボランティアの育成および導入等、様々なニーズに応える取り組みが行われつつあるが、在住外国人を対象に「多文化共生推進」を目的とした取り組みをしている博物館はあまり多くない。2019年度に実施した調査では、科学系博物館および東京都内の文化施設で、多文化共生に取り組んでいる施設は約1割であった。国内事例調査では限界があり、海外の具体的な取組を調査する必要がある。また、国内の博物館に対し、多文化共生の取り組み方についての普及や学ぶ機会も不足している。

多摩北部においても外国人居住者人口は増加の傾向にあり、2022年1月現在、約13,000人が暮らしており、10年の間に約2倍に増加している。多摩北部の行政5市が連携し多文化共生に関する取組を推進している他、東村山市では独自の多文化共生推進プランの策定、小平市では、オリンピック開催にあわせておもてなし事業を展開している。しかしながら博物館施設自ら働きかけ取り組むことも難しく、かつ外国人居住者との接点を持つことができていないといった課題がある。

以上の現状を踏まえ、当館が目指すべき方向性として掲げる2つのミッション「誰もが科学を楽しみ、自分たちの世界をもっと知りたいと思える多様な学びの場をつくりあげること」、「活動の幅を拡げ人々をつなげ地域づくりに貢献すること」、第2次基本計画ローリングプラン2016に追加された「ソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)に基づき、誰もが楽しみ、交流できる場をつくりあげること」の一プロジェクトとして、平成31年度に在住外国人をターゲットとした多文化共生推進プロジェクトを立ち上げ、多文化共生に取り組む文化施設へのヒアリング、やさしい日本語研修や、プログラムを通じたスタッフの多文化共生社会の市民としての意識の醸成、ダイバーシティ対応としての多言語化の推進、地域の市民活動団体や市民、行政との連携を推進しながら各事業を展開してきた。今年度は、本プロジェクトの最終年としてさらなる多言語情報の充実化、新規のやさしい日本語を用いたプログラムの開発実践の外、外部に対する本プロジェクトの取組に関する情報発信に努めてきた。本報告書は令和3年に行ったヒアリング調査およびプログラム等の活動について報告するものである。

3. プロジェクトの実施にあたっては、下記の実行委員会および事務局を組織し、会議を設け意見交換や報告会を行った。また、必要に応じてアドバイザーや講師を招聘し、関係機関のヒアリング調査、プログラムの企画・実施・評価を行った。

●実行委員会

会長	高柳雄一	多摩六都科学館 館長
副会長	山辺真理子	NPO 法人西東京市多文化共生センター 代表理事
委員	村澤慶昭	武蔵野大学グローバル学部 教授
委員	廣澤公太郎	多摩六都科学館 統括マネージャー
幹事	手塚光利	多摩六都科学館組合 事務局長
事務局長	高橋純一	多摩六都科学館 経営管理グループ リーダー
事務局	高尾戸美	多摩六都科学館 研究・交流グループ リーダー
	石山彩	多摩六都科学館 PR グループ リーダー
	蓮田安紀	多摩六都科学館 PR グループ
	安倍覚子	多摩六都科学館 PR グループ
	成瀬裕子	多摩六都科学館 天文グループ
	筋野美穂	多摩六都科学館 研究・交流グループ
	北村沙知子	多摩六都科学館 研究・交流グループ
	湯浅佳世子	多摩六都科学館 アテンダントグループ
	木下佐和子	多摩六都科学館 アテンダントグループ
	田中裕基	多摩六都科学館 研究・交流グループ
	矢野礼美	多摩六都科学館 研究・交流グループ
	佐怒賀陽子	多摩六都科学館 経営管理グループ
	原窓香	多摩六都科学館組合

●協力者(順不同・敬称略)

ピッチフォード理絵(NPO法人青少年自立支援センター)、チョウ・チュンニ(ICOM-CAMOC 理事)、倉持セラ(公益財団法人渋沢栄一記念財団)、平野亜弥(YSC グローバルスクール)、平野智子(港区国際交流協会)、田栗春菜(港区日本語教育コーディネーター)、長倉美紀(世田谷区教育委員会)、村田陽次(東京都生活文化局)、安達萌絵(東京都生活文化局)、井上伸子(一般財団法人東京都つながり創生財団)、河原順一(小平市国際交流協会)、田淵陽子(東久留米国際友好クラブ)、林清(清瀬国際交流会)、田辺俊介(NPO法人西東京市多文化共生センター)、竹村正和(NPO法人西東京市多文化共生センター)、笹島和実(武蔵野大学学生)、加藤歩未(武蔵野大学学生)、林婉鎔(武蔵野大学学生)、葉詠心(武蔵野大学学生)、コウシケン(武蔵野大学学生)、茂野志織里(武蔵野大学学生)、豊福正己(東久留米ほとけどじょうを守る会)、竹内秀夫(東久留米川クラブ)、小松原昌男(東久留米川クラブ)、荒井和男(東久留米川クラブ)、下村央行(東久留米川クラブ)、永安由弥(東久留米川クラブ)、間宮美季(東久留米川クラブ)、杉浦幸子(武蔵野美術大学芸術文化学科 教授)、米徳信一(武蔵野美術大学芸術文化学科 教授)、井富有音(武蔵野美術大学学生)、梨本奈那(武蔵野美術大学学生)、長谷川華蓮(武蔵野美術大学学生)、石崎美智(武蔵野美術大学学生)、鈴木藍(武蔵野美術大学学生)、戸嶋浩子(ひらがなネット株式会社)、吉澤弥重子(ひらがなネット株式会社)、服部勝孝(映像作家)、中村晋也(ヤギサワベース)、篠原京子、赤澤香

1. 事業概要

1. 事業概要

(1) 本事業が目指すもの

多摩六都科学館では、科学館の目指すべき姿として、第2次基本計画ローリングプラン 2016において、「ソーシャル・インクルージョンに基づき、誰もが楽しみ、交流できる場をつくりあげること」を掲げていることは前述したが、これらに基づき立ち上げられた多文化共生推進プロジェクトでは、多摩北部の博物館が多文化共生社会を担う場を実現する場になること、これらが我が国の地方都市博物館の多文化共生モデルとなることを目指し、以下の3つを目的としている。

- ① 我が国の博物館における外国人居住者に対する事業の現況を明らかにする。
- ② 地域の多文化支援実践者と共に、外国人居住者向けサービスの向上を目指した博物館の環境整備および教育プログラムの企画開発を実施、評価を行うとともに、多摩地域および本テーマに興味関心を持つ人々のコミュニティを構築する。
- ③ ICOM 京都 2019 の開催をきっかけに、多摩北部と世界中の博物館関係者が多文化共生をテーマとした取組について情報交換や相互協力の機会を創出する。

- ・ 博物館が在住外国人と共に学びあい、地域との交流促進の場になる
- ・ 当館の活動をきっかけに多文化共生推進の輪が全国に広まっていく

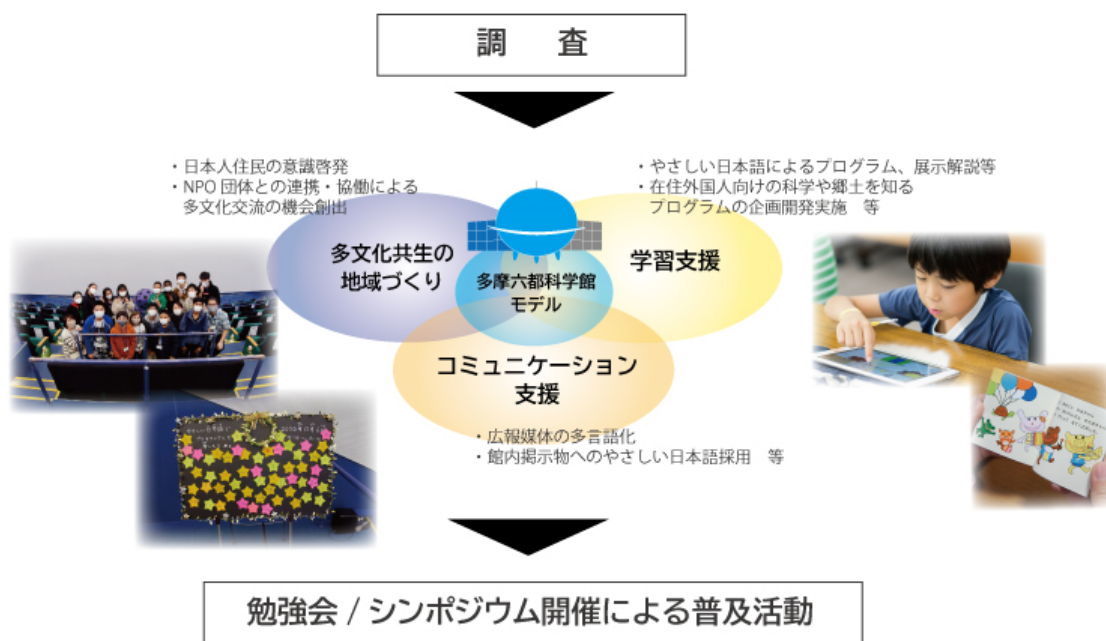


図1 多摩六都科学館が目指す多文化共生推進モデルのイメージ

(2)本事業の計画

本事業では、既述の目的に沿って、①博物館等における多文化共生の取り組み実態調査、②科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備、③地域在住外国人向けの特別プログラムの開発・実践・評価、④ICOM 京都 2019、都市博物館のコレクション・活動国際委員会(CAMOC)との共催事業の開催、⑤博物館と多文化共生に関する講演会およびワークショップの開催、⑥博物館における多文化共生の取り組みに関するシンポジウムの開催の6つを計画している。

(3)各年度の実施事業

【2019 年度】

2019 年度は、①博物館等における多文化共生の取り組み実態調査、②科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備、③地域在住外国人向けの特別プログラムの開発・実践・評価、④ICOM 京都 2019、都市博物館のコレクション・活動国際委員会(CAMOC)との共催事業の開催を実施した。詳細については、『ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト 2019 報告書』で報告している。

① 博物館等における多文化共生の取り組み実態調査

●国内の博物館における在住外国人を対象とした取り組みアンケート調査

全国科学博物館協議会加盟館、全国科学博物館連携協議会加盟館、東京都内文化施設の計 540 館を対象に、2020 年 1 月 20 日～2 月 18 日の 39 日間実施した。本調査の回収結果は、回収数 310 件でそのうち有効回答数は 308 件、有効回答率は 57%であった。

●国内の博物館その他の多文化共生の先進事例ヒアリング調査

- ・豊橋市中央図書館(2019 年 7 月 17 日実施)
- ・一般社団法人 kuriya(2019 年 10 月 31 日実施)
- ・アーツ前橋(2019 年 12 月 9 日に実施)
- ・北九州市いのちのたび博物館(2020 年 2 月 6 日実施)

② 科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備

- 多摩六都科学館 WEB へのやさしい日本語ページの実装(2020 年 2 月 18 日公開)
- やさしい日本語スタッフ研修(2019 年 10 月 10 日実施)37 人参加

③ 地域在住外国人向けの特別講座の企画・開発・実践

- 「科学館の絵本をつくろう」(2020 年 1 月 12 日実施)1 回目希望無、2 回目 10 人参加
- 「やさしい日本語でプラネタリウムをたのしもう」(2020 年 1 月 18 日実施)2 組 5 人参加

④ ICOM 京都 2019、都市博物館のコレクション・活動国際委員会(CAMOC)との共催事業の開催

- ICOM 京都 2019 大会後のポストカンファレンスツアー(2019 年 9 月 8 日実施)7 개국 21 人参加

【2020 年度】

2020年度は、①博物館等における多文化共生の取り組み実態調査、②科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備、③地域在住外国人向けの特別プログラムの開発・実践・評価、④博物館と多文化共生に関する講演会およびワークショップの開催、開催を実施した。

① 博物館等における多文化共生の取り組み実態調査

- 国内の博物館その他の多文化共生の先進事例ヒアリング調査
 - ・YSC グローバルスクール(2020年7月7日実施)
 - ・東京都美術館(2020年10月31日実施)

② 科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備

- 多摩六都科学館 WEB へのやさしい日本語を用いた情報発信(毎月イベント情報を公開)
- やさしい日本語スタッフ研修(2020年9月4日実施)
 - ・スタッフ等39人、その他関係者計49人参加
 - ・在住外国人8人を相手にしたコミュニケーション研修
- 日本語/英語によるガイドブック制作(2021年3月発行)
- 多言語セルフガイドの制作(2021年3月発行)
 - ・5つの展示室ごとの3つの展示を解説
 - ・日本語、やさしい日本語、英語、中国語、韓国語

③ 地域在住外国人向けの特別講座の企画・開発・実践

- 「科学館の絵本をつくろう」(2020年10月12日実施)
 - ・4組8人参加
- 「やさしい日本語でプラネタリウムをたのしもう」(2020年12月18日実施)
 - ・58人参加
- 武蔵野大学連携プロジェクト
 - ・日本語コミュニケーション学科1年88人が受講(半数は留学生)
 - ・2020年6月～7月にオンライン講義として実施
 - ・グループワークで当館のプロモーションムービーを作成
 - ・優秀作品4本(日本語版3本、中国語版1本)を当館公式 YouTube に公開(2020年8月公開)
 - ・有志による当館見学会を10月20日に実施

④ 博物館と多文化共生に関する講演会およびワークショップの開催

- 多文化共生プロジェクトオンライン成果発表会(2021年2月23日に実施)31人参加
- やさしい日本語と博物館・オンライン講座(2021年2月23日に実施)51人参加
- その他、研究発表等
 - ・令和2年度学芸員技術研修会「ユニバーサル・ミュージアムⅡ(やさしい日本語)」

開催日時:2020年9月15日(火)10:00~17:00(9:30~受付開始)

開催場所:鹿児島国際大学(鹿児島県鹿児島市坂之上8-34-1)

主催:「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業実行委員会(九州産業大学美術館他6館)

内容:本プロジェクトの事例紹介を行った

担当:高尾戸美

受講者数:30人(鹿児島21人、宮崎2人、福岡4人、東京3人)

・やさ日フォーラム

開催日時:2021年2月9日(火)14:00~16:15

開催場所:東京都つながり創生財団 会議室 ※ウェビナーによるオンライン開催

対象者:都内区市町村、国際交流協会、社会福祉協議会等の職員

内容:教育文化分野での活用事例として、多摩六都科学館の「やさしい日本語」プラネタリウム&スタッフ研修について発表を行った

担当:高尾戸美

受講者数:298人

・全国科学博物館協議会第28回研究発表大会

開催日時:2021年2月26日(金)9:00~16:55

開催場所:※ウェビナーによるオンライン開催

対象者:全国科学博物館協議会加盟館

内容:研究発表として本プロジェクトの調査結果の一部および活動事例紹介を行った

受講者数:203人

担当:高尾戸美

【2021年度】

2021年度は、①博物館等における多文化共生の取り組み実態調査、②科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備、③地域在住外国人向けの特別プログラムの開発・実践・評価、④博物館と多文化共生に関する講演会およびワークショップの開催、開催を実施した。

① 博物館等における多文化共生の取り組み実態調査

●都内の多文化共生先進事例ヒアリング調査

・港区国際交流協会(2021年12月24日実施)

・世田谷区教育委員会(2022年1月13日実施)

●モニター調査

・1回目(2021年8月21日実施)午前:5組15人、午後:2組6人

・2回目(2021年12月12日実施)午前:3組10人

●圏域5市の多文化共生関係団体へのヒアリング調査

・小平市、小平市国際交流協会(2021年12月16日実施)

- ・西東京市、NPO 法人西東京市多文化共生センター(2021年12月17日実施)
- ・清瀬市、清瀬市国際交流会(2021年12月23日実施)
- ・東村山市(2021年12月23日実施)
- ・東久留米市、東久留米国際友好クラブ(2022年1月18日実施)

② 科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備

- 多摩六都科学館 WEB へのやさしい日本語を用いた情報発信(毎月イベント情報を公開)
- 日本語/中国語、日本語/韓国語によるガイドブック制作(2022年2月発行)
- みどころマップの多言語化(2022年3月発行)
 - ・5つの展示室の多言語化
 - ・日本語、やさしい日本語、英語、中国語、韓国語
- ワークシートの開発と多言語化(2022年3月発行)
 - ・5つの展示室見学ワークシート(低学年向け・高学年向け)を開発
 - ・日本語、やさしい日本語、英語、中国語、韓国語の多言語化で作成

③ 地域在住外国人向けの特別講座の企画・開発・実践

- 「やさしい日本語でプラネタリウムをたのしもう」
 - ・1回目(2021年9月26日実施)73人参加(関係者等7人含む)
 - ・2回目(2021年12月5日実施)53人参加(視察10人、関係者等5人含む)
- 「やさしい日本語で黒目川の魚を観察しよう」
 - ・1回目(2021年8月19日実施)10組20人参加
 - ・2回目(2021年10月10日実施)10組20人参加
- 「キッチンでカラーマジック実験～身近なものの性質を調べよう～」
 - ・1回目(2021年11月28日AM実施)12人参加
 - ・2回目(2021年11月28日PM実施)11人参加

④ 博物館と多文化共生に関する講演会およびワークショップの開催

- その他、研究発表等
 - ・日本ミュージアム・マネジメント学会研究発表大会
開催日時:2021年6月5日(日)10:00~17:00
開催場所:オンライン
主 催 :日本ミュージアム・マネジメント学会
内 容 :研究発表にて、『「やさしい日本語」がもたらす科学館の多文化共生推進の可能性～多摩六都科学館における「やさしい日本語」職員研修の事例から～』を発表
担 当 :高尾戸美
参 加 者 :110人
 - ・日本女子大学学芸員養成課程博物館実習「やさしい日本語と博物館」
開催日時:2021年7月3日(土)14:00~16:00

開催場所：多摩六都科学館

内 容：本プロジェクトの取組の紹介の講義および、やさしい日本語書き換えワークショップ

担 当：高尾戸美・蓮田安紀

受講者数：10人

・福島県国際交流協会 令和3年度市町村国際交流協会等ネットワーク会議

開催日時：2021年9月16日(土)13:30~15:30

開催場所：オンライン

内 容：本プロジェクトの取組の紹介

担 当：高尾戸美

受講者数：34人

・令和3年度学芸員技術研修会「ユニバーサル・ミュージアムⅡ(やさしい日本語)」

開催日時：2022年2月21日(月)10:00~17:00(9:30~受付開始)

開催場所：福岡市美術館

主 催：「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業実行委員会(九州産業大学美術館他6館)

内 容：本プロジェクトの取組の紹介の講義および、やさしい日本語書き換えワークショップ(東京都生活文化局村田氏と共に実施)

担 当：高尾戸美

受講者数：18人

・一般社団法人つながり創生財団「やさしい日本語活用事例紹介」

(web/パンフレット)

やさしい日本語でプラネタリウムをたのしもう

https://tabunka.tokyo-tsunagari.or.jp/pdf/yasanichi/14_tamarokuto.pdf

担 当：高尾戸美

・一般社団法人つながり創生財団「東京都多文化共生ポータルサイト」(web)

れすばす 2021年6月号クローズアップ

「多摩六都科学館 科学館が取り組む多文化共生プロジェクト」

https://tabunka.tokyo-tsunagari.or.jp/lespace/close/close_2106.html

担 当：高尾戸美・蓮田安紀

・放送大学教材・ラジオ収録協力

一般財団法人放送大学教育振興会『改訂新版博物館教育論』(2022年3月出版)

第13章国際化・地域と博物館のpp.230-231に多文化共生推進プロジェクトの取り組みを取り上げてもらった。また、第13回ラジオ収録においてもゲストとして事例紹介を行った。

担 当：広報スタッフ(原稿確認)、高尾戸美(ラジオ収録)

2.多文化共生の取り組み実態調査

2-1. 調査概要

1. 調査概要

今年度は、海外の博物館その他の多文化共生の先進事例調査、東京都内の自治体・文化施設の多文化共生の取り組み実態のヒアリング調査、在住外国人による多摩六都科学館モニター調査、圏域行政および活動団体を対象としたヒアリング調査の4つを計画した。海外の博物館その他の多文化共生の先進事例調査については、今年度も新型コロナウイルス感染拡大が終息しなかったため実施を断念した。都内の先進事例および圏域のヒアリング調査対象および実施日については以下に記す。各調査内容については、次ページ以降に記す。

2. 調査対象および実施日

(1) 東京都内の自治体、文化施設の多文化共生の取り組み実態調査

- ・一般財団法人港区国際交流協会(2021年12月24日実施)
- ・世田谷区教育委員会(2022年1月13日実施)

(2) 在住外国人による多摩六都科学館モニター調査

- ・1回目(2021年8月21日実施)
午前:5組15人、午後:2組6人
- ・2回目(2021年12月12日実施)
午前:3組10人

(3) 圏域5市の在住外国人の実態調査及び分析

- ・小平市、小平市国際交流協会(2021年12月16日実施)
- ・西東京市、NPO法人西東京市多文化共生センター(2021年12月17日実施)
- ・清瀬市、清瀬市国際交流会(2021年12月23日実施)
- ・東村山市(2021年12月23日実施)
- ・東久留米市、東久留米国際友好クラブ(2022年1月18日実施)

2-2-1. 一般財団法人 港区国際交流協会

調査日：2021年12月24日（金）14:00～17:00

対応者：平野智子氏（港区国際交流協会）

田栗春菜氏（港区国際交流協会、港区日本語教育コーディネーター）

調査者：高尾、蓮田

WEBサイト：<http://www.minato-intl-assn.gr.jp>

1. 調査の目的

一般財団法人 港区国際交流協会（以下、同協会と記す）は、会員のボランティア活動を母体とし、各種イベントなどを通じて、多文化社会の実現を目的として1992年に任意団体として設立、2009年に一般財団法人化された。同協会は「異質な文化を受け入れ、共感と寛容性を持って相互理解をはかることで、包摂（インクルージョン）と多様性（ダイバーシティ）の実現に貢献すること」を使命とし、幅広い国際交流活動や外国人支援に取り組んでいる。港区には、大使館関係者等、文化芸術に感度が高い層が多く居住していることに注目し、それらの層に向けた取り組みについて具体的な事例をヒアリングすることを目的に港区国際交流協会を調査対象とした。

2. 在住外国人向けプログラム

（1）取り組み実施の背景

港区は80を超す大使館及び120か国以上の在住外国人が居住する多文化多言語社会を象徴する地域である（2022年1月1日現在の在住外国人人口は、16,929人：区総人口の約6.6%である）。同区では、2008年に国際化推進係が設置され、港区ならではの国際性豊かな地域特性を効果的に生かした「港区国際化推進プラン」を平成22（2010）年度から策定し、国籍や民族が異なる人々が文化的違いを認め合いながら一人ひとりの人権を尊重し、地域社会の一員としてともに考え、行動し、支え合う「多文化共生社会の実現」を目指している。同協会はこのプランの推進において重要な役割を担っており、会員によるボランティア活動の支援拠点となっている。（2021年12月現在、会員213人、団体及び法人会員4組が活動している）

（2）実施内容

同協会では、異文化交流を通じて双方の心の豊かさを育むきっかけづくりとして、①国際交流（クロスカルチュラルコミュニケーション）、②語学講座、③外国人サポート事業を行っている。それらの活動は市民ボランティアによるものが多い。ここでは、国際交流事業、外国人サポート事業について紹介する。

① 国際交流

同協会では、クロスカルチュラルコミュニケーション事業として、「Let's Rediscover Japan(LRJ)」、「Let's Chat in Japanese(LCJ)」イベントを実施している。LRJは「英語による日本再発見の会」、LCJは「日本語で話す会」が活動しており、通訳などの言語支援活動も行っている。この他、日本文化紹介事業や、文化エクスチェンジチームによる日本文化体験や名所旧跡探訪といった取組、ニューイヤーパーティー（新年会）、ハイキング（春・秋）、国別紹介（年2回）などのイベントを自ら企画し実行している他、若者層を対象としたユースチームによるイベントも行われている。この他、「汽笛一聲」・「かわらばん」の発行、ウェブサイトによる

広報の運営や、みなと区民まつりへの出展参加、大使館主催行事等への協力も行っている。



② 外国語講座

通訳ボランティア養成講座(英語)をはじめ、中国語、スペイン語などの多言語、初級から上級までのレベル別などきめ細かいプログラムが用意されている。

③ 外国人サポート

外国人サポート事業としては、外国人相談室、みなとにほんご友だちの会、ウェルカムバスケット(いらっしやいませ みなと区)、ホームビジット活動がある。みなとにほんご友だちの会は、日本に住んでいる外国人が地域に参画するきっかけを目的に港区が2018年度から開始した港区委託事業であり、日本人向けに「やさしい日本語」の講座を行うことで、多文化共生の視点を伝え、外国人と日本人が交流しやすい環境の構築に力を入れている。その後のステップとして、外国人住民と日本人住民が互いに日本語で会話する機会を提供する「日本語会話パートナープログラム」や、日本人と外国人の「交流会」を実施している。

(3) 特徴的な活動

① 日本語学習の支援

港区の在住外国人は、英語を中心に生活が成立している人も少なくない。そのような環境下で求められる日本語支援の在り方は、困りごとの解決としての最低限の対応だけでなく、日本人住民とのコミュニケーションの機会の創出がポイントとなる。実際、港区主催の日本語学習支援は、すべて日本語教師の資格を有するスタッフが指導にあたっており、すべて有償対応とすることで、教育の質や支援側のスタッフの雇用環境の保証モデルとなるような人材育成モデルの構築を目指している。学習プログラムは、「教室型」と「交流型」がある。教室型は、日本語についてゼロからレベルに応じて学ぶことができ、内容は、生活・文化、防災等多岐にわたる。交流型としては、対話型プログラム形式で日本語教師がファシリテーターを担当し、ボランティアである日本人サポーターと協働して運営を行っている。この他、既出の「みなとにほんご友だちの会」のように、日本人を対象にやさしい日本語の普及啓発と実践の機会を組み合わせた複数回の講座を開講している。なお、区内の日本語教室は、13教室程度あり、市民による多様な活動が展開されている。

② 区内文化施設との連携

港区国際交流協会は、区内にある東京都庭園美術館および港区郷土歴史館と事業の協働を行っている。東京都立庭園美術館とは、やさしい日本語で美術館をたのしむプログラム「生活の中の文様を見つけよう」を、同協会のみなとにほんご友だちの会参加者を対象に2021年6月に実施した(新型コロナウイルス感染拡大の影響によりオンライン開催)。参加者募集、やさしい日本語の監修などの協力を行っている。この他、港区郷土歴史館と協働し、同館でのやさしい日本語での会話例となる動画を制作した。日本語教室の生徒が出演している。

(4) 課題

社会的包摂の観点から、在住外国人に対しては「支援」が必要と考えられがちであるが、実際に在住する「在住外国人」は多様であり、港区の現状としての在住外国人の「困りごと」は、他の地域とは異なると言える。必要な人に対する支援を行うことは当然であるが、地域住民として、よりよく生きる、豊かに生きるための支援が求められている。そのためにはさらに様々な人々との連携が不可欠となるだろう。

2-2-1. 世田谷区教育委員会

調査日:2022年1月13日(金)10:00~12:00

対応者:世田谷区教育委員会 長倉美紀氏(一財)自治体国際化協会認定 多文化共生マネージャー

調査者:高尾、安倍

URL:<https://www.city.setagaya.lg.jp/mokuji/bunka/007/index.html>

1. 調査の目的

世田谷区における外国人住民の数は23区の中でも中程度であり、全住民に占める割合は他の区と比較して低く、多摩北部と同程度(2%弱)である。同区では、2019年に「世田谷区多文化共生プラン」を制定し、特に在住外国人の子ども向けの学校教育支援については、行政の支援という点で注目すべき取組を行っている。本調査では、学校教育の現場における支援を中心に具体的な事例についてヒアリングを行った。

2. 在住外国人向けの活動

(1) 取り組み実施の背景

世田谷区における外国人住民は全住民に占める割合が23区で低いこともあり、区が多文化共生の取組が注目されることはあまりなかった。しかし、2016年度に国際課が設置されて以来、地域の国際化を考える意見交換会や多文化ボランティア講座、日本語サポーター講座を開き、「世田谷区多言語表記及び情報発信の手引き」を策定し、2018年に「世田谷区多様性を認め合い男女共同参画と多文化共生を推進する条例」を制定した。この条例に基づき「世田谷区多文化共生プラン」を2019年に策定され、「誰もが共に参画・活躍でき、人権が尊重され、安心・安全に暮らせる 多文化共生のまち せたがや」という基本理念と、「地域社会における活躍の推進」、「誰もが安心して暮らせるまちの実現」、「多文化共生の意識づくり及び偏見・差別の解消」の3つの基本方針を掲げ、その他の行政計画と補完・連携し合いながら計画を推進している。同区では、在住外国人のための言語支援として10か国語対応しており、区内の小中学校では、初期指導だけでなく、教育相談、個別指導、補習教室、またその保護者の通訳支援を行っている。

(2) 日本語学習支援

① 学校教育現場における日本語支援

世田谷区では、1990年の出入国管理及び難民認定法の改正を受け、1992年から教育委員会が在住外国人のための学校教育支援に取り組んでいる。日本語の初期指導は通常36時間~40時間行っており、生活言語及び学習言語として、あいうえお…といったひらがなから、各教科の指導にあたっている。コロナ禍に入り、家庭学習の時間が増えたことをきっかけに、「プリント学習ができない」など、保護者が初めてわが子の日本語理解度を知るケースが増加し、これまで取りこぼされていた子どもたちの現状が浮き彫りとなった。同区の教育委員会では、日本語教育の初期指導の重要性から、ボランティアによる学習支援ではなく、日本語教師資格を有する専門家に業務委託をしていたため、急遽追加の予算措置を行い、学習についていけるように追加指導を実施した。これらの取組により、在住外国人および、外国につながりを持つ子どもたちがコロナ禍の影響で理解し始めていた日本語を使用する機会を失い、学びがゼロになることを防ぐことができた。このような行政による柔軟な予算の確保ができる体制は非常に重要であると言えるであろう。

②地域における日本語支援

世田谷区では、市民による日本語教室が非常に盛んである。行政としては入門レベルの指導を年3回行うのみであり、JCA千歳船橋、JCA玉川、日本語サークルわかば、にほんごの会「談話室」という市民ボランティア団体がそれぞれ、教室を開講している。JCAは特に大きな団体で、区内で8教室を運営している(日本語指導のボランティアは、せたがや日本語サポーターと呼ばれている)。これらのボランティア活動は高齢者に非常に人気があるが、ボランティアの教えたいという気持ちと指導のスキルに乖離があり、マッチングさせることは難しい。そのため、区では、ボランティアのためのせたがや日本語サポーター講座を用意している。日本語教師による支援講座を開講し、そこに研修生として関わった後に日本語教室に入る流れをつくっている。

また、子どもではなく、保護者のうち仕事を持たない主婦は特に日本語の支援が必要な状況にあると考える。

(3)課題

世田谷区では、在住外国人に対し、文化施設から積極的な事業は展開されていない。オリンピック・パラリンピックまでは、多言語による情報提供もあまり行われておらず、一部の施設で英語のパンフレットがあるくらいであった。しかしながら、生活者としての外国人としては、日本人同様、文化に触れ、豊かな心を育む機会が必要である。在住外国人への支援となると、「困っていること」に対する支援と考えがちであるがその考えを改める必要がある。

また、在住外国人(特に留学生)は、日本語で話したいという想いを持つ人が多い。そのため、できるだけ日本語で、やさしい日本語接することを心がけるのもよい。場合に応じて母語を使うなど臨機応変なコミュニケーションが求められる。

2-3. 在住外国人による多摩六都科学館モニター調査

1. 調査概要

本調査は、利用者としての在住外国人および外国にルーツを持つ人たちが、①博物館にどのような関心があるか、またその利用状況、②当館の常設展示およびプラネタリウム(もしくは大型映像)を利用しての意見や感想を知ることを目的に2021年8月21日(土)、12月12日(日)の計2回実施した。参加者には、館内の自由見学とプラネタリウム等の観覧後に、アンケート、必要に応じてヒアリングを行った。

対象者は、チラシやWEB等により、公募し、8月21日は午前5組、午後2組の親子計21人、12月12日は、午前3組の親子10人が参加し、両日あわせて大人15件、子ども(未就学児～中学生まで)15件の回答やコメントを得た。

なお、参加者には当館のスタッフが対象者に適切な対応をできているか、また改善点を探るために任意でスタッフの対応評価を行った。いずれもサンプル数は少ないため分析には至らなかったが、参考として以下に概要を記す。

2. 回答者の属性

大人のアンケート回答者のつながりのある国は、多い順からアメリカ、中国、イギリス、イタリア、スウェーデンであった。また、日本在住年は、1年が3件、2年以上10年未満5件、10年以上7件であり、13件はこれからも日本に住むと回答した。子どもは、1年在住していると回答したのが6件で、2年以上5年未満2件、5年以上10年未満5件、10年以上は1件であった。

日本語については、在住年に関わらず、ひらがなについては読むことができるが、カタカナ・漢字については読みだけでなく書くことへ苦手意識があることが伺えた。

3. 博物館の関心・利用状況

博物館の利用状況としては、これまでに行ったことのある館種は、博物館、美術館、科学館(調査当日を除く)、水族館、動物園、植物園であり、モニター調査参加者は博物館に対して興味関心が高い様子がうかがえた。利用頻度については、大人は半年に1度が12件と最も多かった。子どもは単独で博物館に行かないことから、同程度の利用頻度である。

大人に対し、自分にとって博物館がどのような存在であるかという問いに対しては、「色々な考えや知識を得るために大切だと思っています」、「いろいろ面白い知識に触れるところです」、「普段では見られないものがたくさんあり、面白いところです。」、「いつも新しい発見がある」、「知らない事を体験したり見たりできる」、「れきしなどについて色々まなべておもしろいです。」、「こどもに興味を持ってもらいたく、どんどん連れて行ってあげたいです」、「I think it's important to know the essentials of daily life, to have a basic understanding that fosters appreciation.」等、博物館に好意的なコメントがほとんどであった。

子どもに対しては、博物館についてどのように思うかを、①楽しいところ、②勉強するところ、③面白

いところ、④むずかしいところ、⑤遊ぶところの5つから複数選択してもらった。単独で楽しいと回答した件数は3件であったが、複数の中では、13件あった。また、複数選択の組み合わせとして、「楽しいところ」・「むずかしいところ」・「遊ぶところ」、「楽しいところ」・「むずかしいところ」、「楽しいところ」・「勉強するところ」があった。これらは、科学館が単なる娯楽施設ではなく社会教育施設であることの表れであると言える。

4. スタッフのコミュニケーションの評価

当館のスタッフとの会話を通じて、気が付いたことなどを以下に記す。好意的なコメントとして、「皆さん笑顔がいっぱい。気さくにいろいろ教えてくれました。」、「I think they were very friendly, when showing how something worked」、「みんなよくわかっていて、ていねいです。まいにちのせいかつの中のいくつかのことにきょうみをもつようになりました。」、「ゆっくりと相手にあわせて話してくれるので、こどもにもわかりやすくよかったです」、「みなさん気軽に声を掛けて頂き、言葉使いもていねいで、説明も解りやすく、子どもの目線まで下がって説明する所は良かったです。」などがあった。

また、「化学館(原文ママ)の施設や展示物の説明は十分にできていたと思う。どうしてそうなのか、理屈等を説明出来ると良いかも。施設を楽しむ分には十分。よく気づいて話し掛けてくれたには良かった。」、「日本語苦手なので、大概筆談の道具準備したほうがいい(原文ママ)」というコメントがあった。簡易的な説明だけでなく、深い知識をわかりやすく伝えること、また館内スタッフもあらゆるシーンで対応できるように、筆記やICTの活用などを備えることが必要となる。

5. 課題と展望

今回のモニター調査に参加してくれた在住外国人や外国にルーツを持つ人たちは、当館をはじめとするミュージアムを積極的に利用している様子が伺えた。しかしながら、ミュージアムに関心を持たない層については当館のこれらの取組についての情報が届いていないことが想定される。今後も様々な利用者の声を拾う機会をつくり、それらを運営に反映させていきたいと考えている。



常設展示の体験中の様子



アンケート回答の様子

2-4-1. 小平市

調査日：2021年12月16日（木）10:00～11:30

対応者：大竹博文氏、長谷部成美氏（小平市地域振興部 文化スポーツ課）
河原順一氏（小平市国際交流協会（KIFA）事務局長）

調査者：高尾、蓮田

小平市国際交流協会 WEBサイト：<https://www.kifa-tokyo.jp/>

1. 回答者について

小平市国際交流協会(Kodaira International Friendship Association (KIFA))
市民が中心となって地域における国際交流の推進と、外国との交流の促進の活動拠点として、平成2年12月26日に設立された市民組織。活動の目的としているものは、以下の5つである。

- 国際理解と国際親善の普及
- 地域における友好交流
- 地域や日本文化・外国都市や外国文化の紹介
- 国際交流情報の収集と地域への提供
- その他協会の目的達成のために必要な事業

国際理解講座グループ、日本語会話教室指導、日本語会話教室保育、こども日本語教室、ホームビジット(ホスト)、交流イベントグループ、世界の料理グループ、機関紙グループ、生活情報提供チーム、翻訳通訳チーム、災害時対応チームの11グループと、KIFAを運営する事務局からなる。令和2年度ボランティア会員登録者数は149人。

2. 在住外国人の現状

① 人口

令和3年1月1日現在 5,091人 (令和3年1月1日現在 総人口 195,543人)

平成23年1月1日現在 4,275人 (平成23年1月1日現在 総人口 179,728人)

平成13年1月1日現在 3,463人

総人口比は、平成23年は2.4%、令和3年は2.6%の微増となっている。新型コロナウイルス感染拡大以前は5,000人を超えていた。

一橋大学、武蔵野美術大学、朝鮮大学校をはじめ多くの大学がある学園都市で、留学生が多いのが特徴的である。武蔵野美術大学には約600人の留学生が在籍している。

技能実習生の動きはつかめていない。また他市と比較して朝鮮・韓国籍の人たちが多いのは小平市特有かもしれないが、その経路の詳細は不明である。

② 国籍

小平市の在住外国人の国籍(上位から3か国)は以下のとおり。アジア系の国で80%を占めている。

令和3年 中国、韓国・朝鮮、ベトナム、ネパール

平成23年 韓国・朝鮮、中国、フィリピン

平成13年 韓国・朝鮮、中国、ブラジル

③ 年齢や家族構成

令和2年9月現在 世帯数は不明。

構成人数多い順に20代(1,892人)、30代(1,020人)、40代(583人)。

大学の寮やその周辺に住む人は多いが、同じ国の人々が集住している地域は見受けられない。居住目的上位から順に、永住者(23%)、留学(19%)、技術・人文知識・国際業務(11%)。前の回答とともに、留学生が多いことが示されている。

3. 日本語（日常会話）の学習環境

① 市内の日本語教室の数と在籍状況

KIFAによる大人教室が3、子ども教室が1。その他ボランティア団体の教室が6。

② 学習内容

費用は1回あたり200～350円程度。子ども教室は1学期1,000円。教材は教室により異なる。

③ 運営方法

一般市民によるボランティア団体による運営である。

KIFAでは英会話教室も開催しており、こちらへの参加者も多い。その確保された原資をもって日本語教室を安価な費用で安定的に運営できている。

大人教室の講師は全員、日本語教師の有資格者である。子どものクラスはボランティアが教えており、有資格者に限定していない。

留学や就業する本人と子ども世代は日本語のレベル向上が期待できる一方、家にいる機会が多い配偶者にこそ日本語教室への参加を促したいとのこと。このような参加者にとって日本語教室の休憩時間はお茶を飲みながらリラックスして話し、情報交換もできる貴重な場であった。コロナの影響で減ってしまったので、コミュニティーカフェなどとして別に機会を設けることを検討している。

KIFAの大人教室では、月曜日と土曜日の授業の間にボランティアが6ヶ月から8才の子どもの預かりを行っている（※要登録）。入園や入学を控えた子どもを持つ親が安心して授業を受けることができる環境づくりは非常に重要であり、躊躇している人の背中を押すことができる。

また教室へ通うことが難しい場合は、令和3年度の新しい事業として、小学校入学前に親子を対象とした連続講座に参加することができる。これは日本語教室の講師が発案、市内の保育園、私立幼稚園等に広報のサポートを依頼し実現したものである。

これからの課題はともにコロナ収束後の外国人入国者数の増加への対応で、1・2か月程度の集中講座の開催、そして初心者がドロップアウトしないカリキュラムづくりの2点が挙げられた。

4. 学校教育（学習言語）における学習環境

① 市内公立小・中学生の外国籍児童・生徒在籍数

小学校 102人、中学校 28人

② 学校内での支援状況

市立小・中学校に在籍する海外からの帰国児童・生徒や外国籍の児童・生徒で、学校生活や日常生活において、初期の日本語への理解や習得が必要な児童・生徒を対象に、日本語指導師を在籍校に派遣。

③ 進路先及び進路状況

回答なし

④ 現状の課題

回答なし

5. その他の在住外国人の支援について

小平市では行政手続きの際に、やさしい日本語を準備しており、日本語教室の案内も行っている。

KIFAによる在住外国人向けの交流イベントにはフェスティバル、ハイキング、ホームビジットなどがある。また日本人向けには多文化理解、やさしい日本語など様々なテーマの講座や講習会を開催している。

様々なイベントを企画・開催されているが、これからは在住外国人に企画段階から携わってもらえればとのお話があった。これは在住外国人がゲストからパートナーへと関係性が変わる、大きな一歩だろう。こだいら観光まちづくり協会との連携など、今後の企画に期待が膨らんだ。

2-4-2. 東村山市

調査日:2021年12月23日(木)14:00~15:30
対応者:市村僚子氏(東村山市市民部市民相談・交流課)

調査者:高尾、蓮田

1. 回答者について

東村山市は、多摩六都圏域5市の中で唯一多文化共生推進プランを制定している。現在は、東村山市第5次総合計画の下、第2次多文化共生推進プラン(2018年~2022年)を展開している。同市では、英語・中国語・韓国/朝鮮語が使用できる多文化共生相談員を配置するなど多文化共生において先進的な取組を行っている。

2. 在住外国人の現状

① 人口

令和3年 12月1日現在 3,020人(令和3年12月1日現在 総人口151,674人)

平成28年1月1日現在 2,391人(平成28年1月1日現在 総人口150,858人)

総人口比は、平成28年は1.58%から令和3年は1.99%と増加している。また新型コロナウイルス感染拡大下においても外国人人口は増加している。

② 国籍

東村山市の在住外国人の国籍(上位から3か国)は以下のとおり。

令和3年度 中国、韓国・朝鮮、フィリピン

③ 年齢や家族構成

令和3年11月現在 総世帯数は74,815世帯(外国人世帯は2,096世帯、日本人と外国人との混合世帯は778世帯)。

東村山市の統計(令和3年11月30日)による年代別人口は、多い順に30代(735人)、20代(594人)、40代(568人)、50代(440人)、10歳未満(250人)、50代(165人)、10代(164人)

同じ国の人々が集住している地域は見受けられない。

主な在留資格は、上位から順に、永住者(35%)、家族滞在(11%)、技術・人文知識・国際業務(10.5%)となっており、永住者が多い。

3. 日本語(日常会話)の学習環境

① 市内の日本語教室の数と在籍状況

・東村山地球市民クラブ

令和元年度実績は、125回開催、延べ学習者1,366人(1回の授業で約10人が参加)、

延べスタッフ数1,729人。(2021年12月現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため休室中)

② 学習内容

・東村山地球市民クラブ <http://www.hm-gcc.net/index.html>

大人向けの教室として実施。学習者とスタッフ1対1で学習者のレベル・希望に合わせた内容で学習者の日本語能力向上と日本文化・習慣なども紹介している。東村山市が、多文化共生・男女共同参画推進交流室の場を提供している。活動は、毎週水曜日(10:30~12:00、18:00~19:30)、土曜日(10:30~12:00)に実施。ただし祝日、年末年始を除く。会費は地球市民クラブ年会費1,000円、授業1回100円

・東村山子ども日本語教室(市による運営)

小中学生を対象とした教室(2021年12月現在6人が在籍)。会費は無いがテキスト代がかかる。
専門家の養成講座を受けたボランティアが無償で指導している。
毎週水曜日・金曜日15:30~17:00に実施。

③ 運営方法

- ・市民による2団体が大人向けの講座を開催している。
- ・子ども向けは、市主催の養成講座の受講者がボランティアで指導にあたる。養成講座は不定期開催で、令和3年度募集時の定員は24人。(2021年12月現在登録者は16人)。
- ・現状の課題としては、東村山地球市民クラブによる日本語教室がコロナ禍の影響で長期休室となっており、日本語学習希望者の受入場所がないことである。

4. 学校教育(学習言語)における学習環境

① 市内公立小・中学生の外国籍児童・生徒在籍数(令和3年5月現在)

小学校 89人、中学校 33人 ※子ども日本語教室にはあまり来ていない。理由は不明。

② 学校内での支援状況

言語指導(授業の際にボランティアが通訳を行う)、学習指導(放課後、学校内にて個別に勉強を教える)

③ 進路先及び進路状況

不明

④ 現状の課題

児童・生徒の言語が使用できる言語指導ボランティアがいない場合対応ができない。学校との連携が必要である。

5. その他の在住外国人の支援について

- ・外国人窓口の設置(英語・中国語・韓国/朝鮮語が使用できる多文化共生相談員が対応)
- ・多文化共生事業(多文化共生に関する市民向け講座、語学学習者による多言語スピーチ大会の実施、年に一度の専門家による無料相談会、年に一度の災害時外国人支援ボランティア養成講座)の実施
- ・市内には、東村山地球市民クラブの外に、東村山国際友好協会、東村山市日中友好協会
- ・この他、外国人保護者向けに小学校の説明会(教育委員会の協力のもと開催)や、防災訓練を実施している。
- ・日本人市民も参加できる講座として、日本語教育に関する市民講座、やさしい日本語講座を実施している。
- ・日本人市民と在住外国人との交流イベントとして、東村山市日中友好協会や東村山地球市民クラブが交流イベントを実施していたが、コロナ禍以降中止となっている。

2-4-3. 清瀬市

調査日：2021年12月13日（火）10:00～11:45
対応者：小田島氏、増淵氏（清瀬市企画部企画課）
林氏（清瀬国際交流会）

調査者：高尾、蓮田

1. 回答者について

清瀬国際交流会 Kiyose International Club (KIC)

外国人との交流を通じ、多文化共生社会の実現をめざすボランティア団体。

1991年に、清瀬市内にある結核研究所が受け入れていたアジア・アフリカ・中南米等の研修生の方たちとの交流の場として創設された。地域在住の外国籍の方たちが安心して暮らせるように、日本語教室などの支援を行うほか、各組織に分かれて活動を行っている。

- 国際交流事業（国際交流パーティー、国際理解講座、市民まつりへ出店参加など）
- 清瀬でも英語しゃべらん会
- 日本語教室（クラス運営、学習者スピーチ発表会やボランティア養成講座の開催）
- 多文化共生事業（コミュニケーション・生活支援）
- コーラス事業（コンサートの開催）

2021年12月現在、会員60人程が活動している。

2. 在住外国人の現状

① 人口

令和3年12月現在 1,303人

平成31年1月現在 1,262人

平成23年1月現在 1,039人

総人口との割合は、平成23年1月は1.4%、令和3年12月は1.7%の微増となっている。新型コロナウイルスの影響がない平成31年と比較しても減少していない。

② 国籍

令和3年 中国、フィリピン、韓国

平成28年 中国、フィリピン、韓国

平成23年 中国、韓国、フィリピン

清瀬市の在住外国人の国籍（上位から3か国）は上記のとおり中国籍は全体の40%前後を占めている。またフィリピン国籍15%も前後と、ここ数年大きな変化はないが、韓国籍が23%から12%と大幅に減っている。令和3年はこれ以降ベトナム、ネパールが続く。

③ 年齢や家族構成

外国人世帯数

200組程と推測される。

構成人数（多い順）

令和3年 16歳未満132人 16歳以上1,171人

④ 居住目的

永住者555人 家族滞在112人など

3. 日本語（日常会話）の学習環境

① 市内の日本語教室の数と在籍状況

1か所。マンツーマン学習を行っている。

2年前の新型コロナウイルスの影響を受けていない時点で大人クラスは火・木・金曜日の3クラス。火・木クラスはそれぞれ15人前後、金クラスは10人が在籍していた。水曜日の子どもクラスは8人程が在籍していた。コロナ後は、各クラスとも3から4割の出席率で推移している。(2021年12月現在)

② 学習内容

上記の4クラスとも2時間、週1回。3ヶ月を1学期単位として11～12回(年回44回)。

料金は1学期1,000円。共有教材と、先生独自の教材と併用して使用している。N1レベルはおらず、N2が3人ほどである。ほかにはN3以下のため、やさしい日本語でないと理解できない。

③ 運営方法

各クラスから運営委員としての世話人2人を選出している(6ヶ月任期)。世話人会を月1回開催。

教室では会話、漢字・ひらがなの読み書きなどの自己申告を考慮し、各ボランティアが臨機応変に対応している。

年1回日本語ボランティア養成講座を開催している。2021年度はオンラインで開催し、25人が受講した。うち60～70%がボランティアとして活動しているが、高齢者が多いこともありコロナを境に活動を休止している。

学習者として10年以上継続して通っているケースもあるが、以前から継続性が低いことが課題である。

4. 学校教育（学習言語）における学習環境

① 市内公立小・中学生の外国籍児童・生徒在籍数

小学校 41人、中学校 20人

② 学校内での支援状況

市内の学校で清瀬国際交流会のスタッフがサポートを行っているが、限定的であり、全員をサポートできていない。

③ 進路先及び進路状況

回答なし

④ 現状の課題

学校や市からの案内などの送付物について、保護者へ内容が伝わらない。

5. その他の在住外国人の支援について

清瀬市は国際交流会(KIC)へ年間20万円の財政支援を行っている。また、近隣5市とも連携し外国人支援事業に取り組んでいる。

多摩六都科学館での多文化共生プロジェクトのことは知っており、在住外国人も広報物を見ているはずだが、アクセスの悪さなどから、実際に関連イベントに参加することは難しい状況である。

「清瀬市は学校・企画課・教育委員会の間で連携がうまく取れていないように感じる一方で、東久留米市では学校の状況を把握している。」とのコメントがあった。在住外国人の抱える問題に対処するには各部署、組織との連携が重要であることを改めて感じた。

清瀬市社会福祉協議会が在住外国人の相談窓口を立ち上げる予定があるとの話があった。今後は福祉の面からのサポートも期待できる。

(補足:清瀬市社会福祉協議会では清瀬国際交流会と清瀬市企画課と連携し、外国人支援の一環として「こまったときのヘルプカードを作成中。)

2-4-4. 東久留米市

調査日：2022年1月18日（木）14:00～15:30
対応者：瀬戸口恵美氏、神藤利三氏（東久留米市市民部生活文化課）
田淵陽子氏（東久留米国際友好クラブ）

調査者：高尾、蓮田
東久留米市国際友好クラブ WEBサイト：<http://hif201206.sakura.ne.jp/>

1. 回答者について

東久留米国際友好クラブ(HIF)は、1993年4月25日に地域ボランティア団体として設立された。設立当初は、外国人に対する日本語学習支援を活動の中心に置き、日本語講座をスタートさせた。その後、日本語教室として拡充され、現在は、大人3クラス、子どもクラスの4つのクラスを設置している。HIFは、この日本語学習支援活動の他にも活動を広げており、交流事業(広報活動、交流活動)と生活支援事業(日本語学習支援、その他の支援)の2つの事業を主たる活動として展開している。令和2年度ボランティア会員登録者数は60人程度。

2. 在住外国人の現状

① 人口

令和3年1月1日現在 2,265人（令和3年1月1日現在 総人口117,007人）
平成24年1月1日現在 1,653人（平成24年1月1日現在 総人口114,414人）
総人口比は、平成24年は1.4%から令和3年は2.0%と大きく増加している。また新型コロナウイルス感染拡大下においても外国人人口は微増している。

② 国籍

東久留米市の在住外国人の国籍(上位から3か国)は以下のとおり。上位ではないが、この十年でベトナム、ネパールが急増している。

令和3年度 中国、韓国・朝鮮、フィリピン

平成24年度 中国、韓国・朝鮮、フィリピン

③ 年齢や家族構成

令和3年11月現在 総世帯数は1,601世帯(外国人世帯は951世帯、日本人と外国人との混合世帯は650世帯)。

地域日本語教室実態調査(令和2年9月1日)による年代別人口は、多い順に30代(527人)、20代(428人)、40代(410人)、50代(326人)、60代以上(227人)、10代(171人)、10代未満(163人)

大学の寮やその周辺に住む人は多いが、同じ国の人々が集住している地域は見受けられない。

主な在留資格は、上位から順に、永住者(40%)、家族滞在(10%)、技術・人文知識・国際業務(10%)となっており、永住者が多い。

3. 日本語（日常会話）の学習環境

① 市内の日本語教室の数と在籍状況

・HIFによる大人向けは3教室(月・水・木)、子ども向けは1教室、計45人在籍。

・東久留米にほんごクラスは1クラス(火曜日夜間)21人在籍。

② 学習内容

原則週1回、学習者は通年入会可で、希望する限り参加を継続できる。

会費月300円、学習教材がある。指導はマンツーマンで実施している。

③ 運営方法

- ・東久留米市の主催で、東久留米国際友好クラブ、東久留米にほんごクラスとの協働事業である。
- ・日本語教室活動に関しては、東久留米市と協定を結んで協力関係にある。生活文化課は日本語教室活動全般にわたりHIFが申請した日時に市内公共施設を提供している。協働の活動であるという意識、市のバックアップがあることが、参加者の信頼感を高めることにつながっている。
- ・子どもクラスについては、年齢の上限を設けていない。幼稚園年長から17歳が在籍している。
- ・大人クラスは初級～上級の学習者がいるが、習熟度の測定を教室内で行うことはない。日本語能力試験の結果がひとつの目安となる。
- ・現状の課題としては、ボランティア不足(学習者の増加により、マンツーマンではない新しい学習の形を模索している(少人数グループ学習等)。この他、オンライン学習の対応も課題である。

4. 学校教育（学習言語）における学習環境

① 市内公立小・中学生の外国籍児童・生徒在籍数(令和4年1月現在)

小学校 64人、中学校 21人

② 学校内での支援状況

回答なし

③ 進路先及び進路状況

回答なし

④ 現状の課題

HIFでは、学校連携がまだできていないと感じているが、ボランティアスタッフが学校に赴いて放課後に支援している例がある。学校から依頼があれば可能な場合は対応する。

5. その他の在住外国人の支援について

- ・行政の支援体制としては、随時、多文化共生担当課で、各部署に自動翻訳機の貸出を行っている。また翻訳・通訳ボランティア登録制度により派遣を行っている。
- ・市内の市民団体組織として、上記の外、「虹のひろば～外国につながる子どものサポートの会」がある。
- ・日本人市民を対象とした日本語教室ボランティアの説明会を実施している。

2-4-5. 西東京市

調査日：2021年12月17日（金）15:30～16:30

対応者：西東京市生活文化スポーツ部 文化振興課 職員

田辺俊介氏（NPO法人 西東京市多文化共生センター 副代表理事）

竹村正和氏（NPO法人 西東京市多文化共生センター 理事）

調査者：廣澤、蓮田

NPO法人 西東京市多文化共生センターWEBサイト：<https://www.nimic.jp/>

1. 回答者について

NPO法人 西東京市多文化共生センター(NIMIC)

西東京市長の依頼により「国際交流組織設立検討懇談会」が開かれ、2006年3月にこの懇親会のメンバーを中心に設立された。2008年10月に東京都から特定非営利活動法人の認証を受けた。

異なる文化的背景を持つ人々が、宗教や信条、生活習慣の違いを互いに理解し尊重し合い、偏見や差別意識を持つことなく、共に地域で暮らすことのできる「多文化共生社会」を築くことで、世界平和に寄与することを目指して活動している。活動内容は以下の3つに分かれている。

- 多文化理解の促進（留学生ホームビジット、日本語スピーチコンテストなど）
- 地域に在住する外国人支援（相談窓口の運営、学校や市の機関への通訳派遣、こども日本語教室など）
- 多文化共生に向けての活動の活性化（西東京市から受託の日本語ボランティアのフォローアップ講座、ホームページの多言語化、会員向けメルマガ「NIMIC通信」の発行など）

2021年12月現在、8団体が登録し、184人が活動している。

2. 在住外国人の現状

① 人口

令和3年1月1日現在 5,050人（総人口 206,047人）

平成28年1月1日現在 3,478人（総人口 198,974人）

平成23年1月1日現在 3,372人

総人口との割合は、平成28年は1.7%、令和3年は2.5%に増加している。

② 国籍

西東京市の在住外国人の国籍（上位から3か国）は以下のとおり。平成27年12月には117人だったベトナム国籍の人数が、令和2年12月には350人と2倍以上に増え、フィリピンを抜いて3番目に多い国籍となった。

令和2年12月31日現在 中国、韓国、ベトナム

平成27年12月31日現在 中国、韓国、フィリピン

平成22年12月31日現在 中国、韓国、フィリピン

③ 年齢や家族構成

外国人世帯数

令和2年12月31日現在 3,089（混合世帯数 1,064 総世帯数 100,220）

平成27年12月31日現在 1,959（混合世帯数 926 総世帯数 93,493）

平成22年12月末日作成 1,887（混合世帯数 — 総世帯数 91,056）

平成27年には総世帯数に対し2.1%、令和2年には3.1%の微増となった。

構成人数（多い順）

20代（1,585人）、30代（1,148人）、40代（719人） ※令和2年12月31日現在

④ 居住目的

回答なし

3. 日本語（日常会話）の学習環境

① 市内の日本語教室の数と在籍状況

12団体

② 学習内容

個人または少人数レッスン。

会費は各団体によるが、You-I日本語教室の場合は月100円。

③ 運営方法

一般市民によるボランティア団体による運営である。

習熟度に差があるため個別指導を行っており、教材は決めておらず、柔軟に対応している。

4. 学校教育（学習言語）における学習環境

① 市内公立小・中・高校生の外国籍児童・生徒在籍数

回答なし

② 学校内での支援状況

西東京市教育委員会教育指導課・西東京市生活文化スポーツ部文化振興課・NPO法人 西東京市多文化共生センター(NIMIC)が連携しサポートを行っている。学校、家庭それぞれに情報発信している。

● 通訳ボランティア派遣制度

保護者との意思疎通が難しい面談や相談などにNIMICより派遣される。1回2時間まで。無料。年に20回程の要請がある。

● ボランティアスタッフによるサポート

学校からのお知らせがわからない時など。毎週金曜日は多文化共生センターで多言語対応ができる(主に中国語・英語・韓国語)。

● 多言語版の広報物

「小学校のご案内」を各学校で配布している。事前にNIMICに申請すれば、通訳ボランティアなどが同席して説明している。

● 児童・生徒の学習サポート

➤ 日本語適応指導(初期指導):教育委員会

日本語がまったく分からない、または不十分な児童・生徒が対象。教育委員会が派遣する指導者から、在籍校で100時間までの初期指導を受けることができる。学校長からの申請が必要。

➤ 子ども日本語教室(小学部・中学部):NPO法人 西東京市多文化共生センター(NIMIC)

小学部は市内3か所、中学部はイングリッシュ会議室で、放課後に日本語等の指導を行っている。週1回、無料。学校の担任、保護者からの連絡により親子面談を実施し、その後受講が始まる。

③ 進路先及び進路状況

回答なし

④ 現状の課題

回答なし

5. その他の在住外国人の支援について

学校での支援については、市とNIMICそして学校の連携がとれている印象を受けた。NIMICはコンシェルジュのような、問題がある場合にまず寄れる場所として存在感を発揮したいとお話されていた。

2-4-6. 圏域5市調査結果一覧
ヒアリング調査 回答① 在住外国人の現状

項目	小平市	東村山市	清瀬市	東久留米市	西東京市
①人口 調査実施	5,091人 令和3年1月1日現在	3,020人 令和3年12月1日現在	1,303人 令和3年12月現在	2,265人 令和3年1月1日現在	5,050人 令和3年1月1日現在
②国籍 (上位3つ) 調査実施	・中国 ・韓国・朝鮮 ・ベトナム 令和3年	・中国 ・韓国・朝鮮 ・フィリピン 令和3年度	・中国 ・フィリピン ・韓国 令和3年	・中国 ・韓国・朝鮮 ・フィリピン 令和3年版	・中国 ・韓国 ・ベトナム 令和2年12月31日現在
③年齢や家族構成 (年代は上位3つ) 調査実施	・世帯数は不明 ・20代(1,892人) ・30代(1,020人) ・40代(583人) 令和2年9月現在	・外国人世帯数2,096 ・うち日本人と外国人の 混合世帯は778 ・30代(735人) ・20代(594人) ・40代(568人) 令和3年11月30日現在	・世帯数は不明 16歳未満:132人 16歳以上:1,171人 令和3年	・外国人世帯数951 ・日本人と外国人の混 合世帯650 令和3年12月1日現在 ・30代(527人) ・20代(428人) ・40代(410人) 令和2年9月1日現在	・外国人世帯数 3,089 ・混合世帯数 1,064 ・20代(1,585人) ・30代(1,148人) ・40代(719人) 令和2年12月31日現在
④主な居住目的 (上位3つ) 調査実施	・永住者 23% ・留学 19% ・技術・人文知識・国際 業務 11% 令和2年9月現在	・永住者 1,062人 ・家族滞在 343人 ・技術・人文知識・国際 業務 317人 令和3年8月31日	・永住者 555人 ・家族滞在112人など 令和3年	・永住者 40% ・家族滞在 10% ・技術・人文知識・国際 業務 10% 令和2年9月1日現在	回答なし

ヒアリング調査 回答② 日本語(日常会話)の学習環境

質問	回答
①市内の日本語教室の数と在籍状況 ②学習内容 ③運営方法	小平市
	①小平市国際交流協会による大人教室が3、子ども教室が1。 その他ボランティア団体の教室が6ある。 ②授業は週1回。費用は1回あたり200～350円程度。 子ども教室は1学期1000円。教材は教室による。 ③一般市民によるボランティア団体が運営。
	東村山市
	①1団体(東村山地球市民クラブ) ②東村山地球市民クラブの場合は年1000円 ③市民団体による運営(無償ボランティア)
	清瀬市
①1か所あり。 火・木・金に大人クラスは40人、水の子どもクラスは8人在籍。 ②授業は週1回、2時間。3ヶ月1学期単位で11～12回(年44回)。 1学期1000円で、ボランティアとの個人レッスン。 共有教材と、先生独自の教材と併用。 ③運営委員を各クラスから2人を選出(6ヶ月任期)。世話人会を月1回開催している。	
東久留米市	
①5クラス(令和3年11月1日現在) 東久留米市国際友好クラブ(月・水・木・子どもクラス 45人) 東久留米にほんごクラス(火曜日夜間 21人) ②原則週1回、希望する限り継続できる。 会費は月300円、学習教材あり、個人レッスン。 ③東久留米市主催。①の2団体との協働事業。	
西東京市	
①12団体(ボランティアによる) ②個人または少人数レッスン。 会費は各団体によるが、You-I日本語教室の場合は月100円。 ③一般市民によるボランティア団体が運営。	

ヒアリング調査 回答③ 学校教育(学習言語)における学習環境

質問	回答
①市内公立小・中・高校生の外国籍児童・生徒在籍数 ②学校内での支援状況 ③進路先及び進路状況 ④現状の課題	小平市
	①小学校 102人、中学校 28人
	東村山市
	①小学校 89人、中学校 33人 ②言語指導(授業の際にボランティアが通訳)、学習指導(放課後に学校にて、個別に勉強を教える) ④児童・生徒の言語が使用できる言語指導ボランティアが不在の場合
	清瀬市
	①小学校 41人、市立中学校 20人 ④学校や市からの案内などの送付物について、保護者へ内容が伝わらないこと。
	東久留米市
	①小学校 64人、中学校 21人
	西東京市
	②西東京市と西東京市多文化共生センター(NIMIC)との連携・協定による通訳ボランティア派遣制度(保護者向け)、ボランティアスタッフによるサポート、日本語適応指導(初期指導。西東京市教育委員会による。100時間まで)、子ども日本語教室(NIMICによる。週1回、無料)

3. 科学館の多文化共生および

多言語化のサービス向上のための環境整備

3-1. 多摩六都科学館ガイドブック(中国語・韓国語)

前年度の日本語・英語版に続き制作した。

- 種別： ①日本語・中国語版 ②日本語・韓国語版 各26頁
 印刷部数： 各2,500部
 配布先： 多摩六都科学館構成市(小平市・東村山市・清瀬市・東久留米市・西東京市) 各300部ほか



世界一に認定されたプラネタリウム

プラネタリウムドーム「サイエンスシーク」は直径27.5m、世界最大級の大きさで、足元から頭上まで星空や銀河に包まれる傾斜式のドームです。

放映機「CHIRONII（カイロンII）」は1台4000万画素を超える画素を映し出し、最も多くの星を放映するプラネタリウム*として世界一に認定されています。大型スクリーンに繊細な星の舞臺が現れ、飛行する姿のあるリアルな星空をお楽しみいただけます。*2022年1月現在

被认定为世界第一的天象厅

天象厅圆顶“科学巨蛋”直径27.5m，为世界第一级别。精湛的圆顶，能让参观者从头到脚都被包围在星空和影像中。

放映机“CHIRONII”像素达1亿4000万以上，画质最高。作为放映最多颗星星的天象厅，被认定为世界第一。在巨大放映机上，精准的映出了繁星点点星光，呈现出具有立体感的真实的星空。

*2022年1月数据 ©GTC

天文スタッフによる生解説*

季節ごとに語り変わる明るい星や星座の物語を、満天の星を見ながら紹介。観客の質問にも丁寧な回答と趣向をこらして、楽しい見聞をお届けします。解説員によって異なる観客層向けの大きな特徴です。*11月～2月まで

天文専門人員現場解説

一流天文家による、空間内観音講義や季節変動の解説や天体ショーの解説。

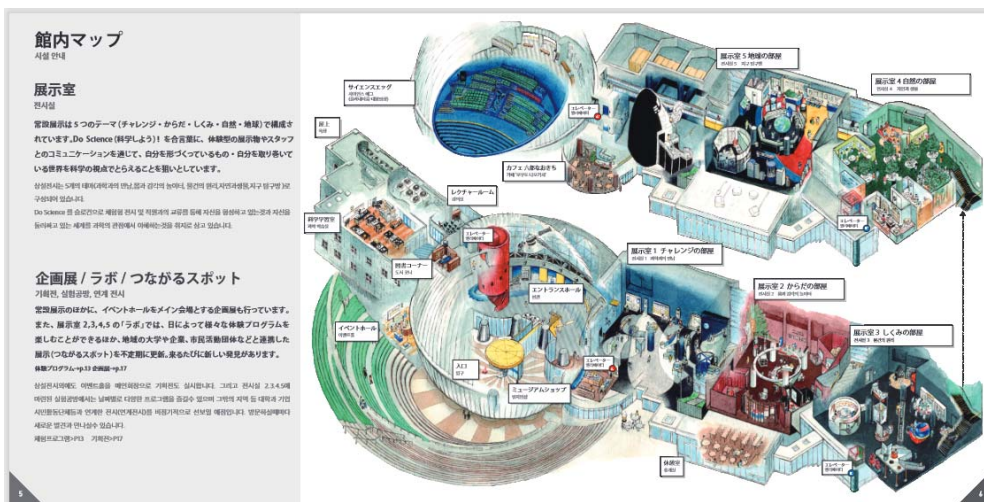
配合毎約1ヶ月更新。一次の企画、二次の企画も最新情報。天象音楽隊の演奏も好評です。*

大型映像

ドームスクリーンならではの臨場感が味わえる映像プログラムです。高精細プロジェクターによる鮮やかな映像を堪能できます。作品によっては英語音声で観ることができます。チケット購入の際に申し出てください。

大屏影院

観客がここで夢想的な高画質映像を堪能できる。感動的な映像を堪能できる。高画質プロジェクターによる鮮やかな映像を堪能できます。作品によっては英語音声で観ることができます。チケット購入の際に申し出てください。



3-2-1. 学校利用向けワークシート(多言語版)

制作者：湯浅佳世子、木下佐和子、田中裕基、高尾戸美、矢野礼美

(以上、武蔵野大学しあわせ研究所客員研究員兼任)

村澤慶昭教授 (武蔵野大学、武蔵野大学しあわせ研究所所員)

笹島和実氏、加藤歩未氏、林婉鎔氏、葉詠心氏、コウシキン氏、茂野志織里氏

(以上、武蔵野大学学生)

内容：武蔵野大学しあわせ研究所との協働による多文化ルーツの児童等も想定した学習支援用ワークシートの開発を目的に、見学にとどまらず、事前事後学習やアクティブラーニングにつながるツールとして、低学年用(自転車)、高学年用(月の暮らし:衣服・食料・住居・遊び)に新たなワークシートを作成した。企画にあたっては、武蔵野大学の学生と意見交換を行うことで、利用者の好奇心を掻き立てる学習シートかつ誰にでも「学ぶ」楽しみを引き出すための配慮と工夫を持つことができるよう配慮を行った。日本語、やさしい日本語・英語・中国語・韓国語版の言語で展開している。

入手方法:多摩六都科学館ホームページよりダウンロード可。

【低学年向け】

<自転車>

やさしい日本語 表(A3)

・館内見学用

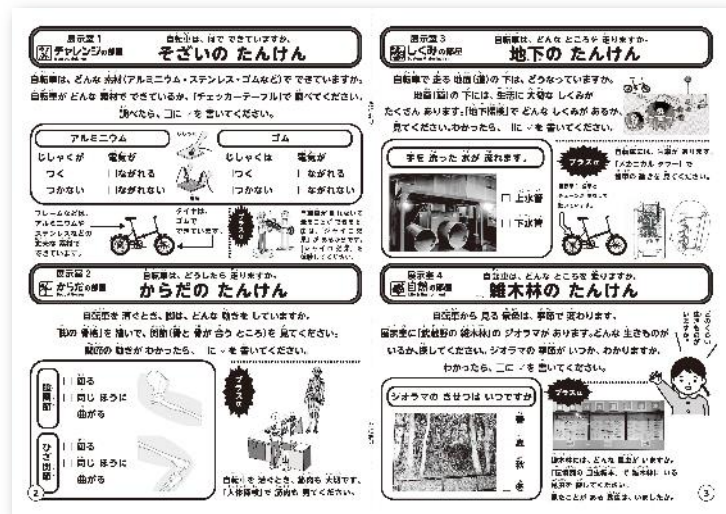


【低学年向け】

<自転車>

やさしい日本語 裏(A3)

・館内見学用



【高学年向け】

<月>

テーマ:衣服編

やさしい日本語 表(A4)

・事前学習用

多分六科科学館 展示ワークシート

月での生活を考えよう! **衣服編** (着るもの)

月での生活は、どんな生活ですか。考えて、イラストや言葉で書いてください。

「衣服編」のメインテーマは、「宇宙服」です。キーワードは、「宇宙服」です。

今、どんな服を着ていますか。描いてください。

どんなところが好きですか。

	地球(東京)	月
距離:大きさ	約 1万 3000 km	約 3500 km (地球の3.6分の1)
質量	約 6×10^{24} kg	約 7.3×10^{22} kg (地球の82分の1)
気温	平均 15 °C	年平均 110 °C 夜平均 -170 °C
空気	ある	ない
重力 重力の大きさ	9.8 m/s ²	1.6 m/s ² (地球の6分の1)

学校 年 組 名前

【高学年向け】

<月>

テーマ:衣服編

やさしい日本語 裏(A4)

・館内見学用

月での生活を考えよう!

宇宙では、宇宙放射線が飛んでいます。地球にも飛んできますか。

放射線がたくさん浴びると体によくないです。地球は、どのように放射線から私たちの体を守っているか、調べてください。

宇宙飛行士が着ている服を調べてください。

1 予チャレンジの課題
「宇宙線観測」
宇宙線は、どのように飛んできますか。
「まっすぐ来る」「くねくね来る」
10秒間に何回飛んできますか(写りますか)。
※その時により回数は異なります

2 地球の部屋
「オーロラ」
どうしてオーロラは、北極と南極の近くで光りますか。

3 プラネタリウムと展示室5の間の通路
「宇宙飛行士」
どうしてこの形をしているか、考えてください。空気や温度は、関係がありますか。

展示のポイント
宇宙線(放射線)、雲

展示のポイント
磁石の力、太陽風(放射線)

展示のポイント
空気、温度、放射線

今、着ている服で月へ行くことができますか。
 行ける 行けない

理由は・・・

【高学年向け】

<月>

テーマ:衣服編

やさしい日本語 まとめ

(A4)

・事後学習用

多分六科科学館 展示ワークシート

月での生活を考えよう! **衣服編** (着るもの)

月での生活は、どんな生活ですか。考えて、イラストや言葉で書いてください。

月では、どんな服を着ますか。



3-2-2. 多摩六都科学館 見どころマップ(多言語版)

内容： 5つの常設展示室の見どころを部屋ごとにまとめた補助教材。
従来の日本語に加え、やさしい日本語・英語・中国語・韓国語版を制作した。

入手方法： 多摩六都科学館ホームページよりダウンロード可。

<https://www.tamarokuto.or.jp/blog/rokuto-report/2022/03/18/main-attraction-map/>



チャレンジの部屋
日本語
(A3)

展示室 見どころマップ (小学4年生向け)

展示室1 チャレンジの部屋
"Meet the Science"

頭と体をつかって「科学する」ことにチャレンジしてみよう。
ボールの動き方や光の色、重さやものの性質をじっくりたしかめよう！

月ってどんなところ？
① 表面重力
月で1kgの重さのものは、月に持っていくと重さはどうなるか？
キーワード：・・・【重力】

どうしてこう動く？
② ボールレース
ボールの動き方を観察しよう。
キーワード：・・・【ボールの動き】

③ バラバラゴルフ
ボールからボールを飛ばして、ゴールまで飛ばす。
キーワード：・・・【ボール】

④ ボールぐるぐる
ボールの動き方を観察しよう。
キーワード：・・・【ボールの動き】

宇宙へ行くには？
⑤ スペースシャトル
宇宙へ行くには、宇宙船が必要。
キーワード：・・・【宇宙船】

光ってなに？
⑥ レインシャドウ
光の色や性質を観察しよう。
キーワード：・・・【光の色】

モノは何からできている？
⑦ チェッカーテーブル
モノの性質を観察しよう。
キーワード：・・・【モノの性質】

多摩六都科学館

チャレンジの部屋
やさしい日本語
(A3)

展示室 見どころ マップ

展示室1 チャレンジの部屋

見たり、触ったりして、どんなルールがあるか考えてみてください

① 表面重力
月で1kgの重さのものは、月に持っていくと重さはどうなるか？
キーワード：・・・【重力】

② ボールレース
ボールの動き方を観察しよう。
キーワード：・・・【ボールの動き】

③ バラバラゴルフ
ボールからボールを飛ばして、ゴールまで飛ばす。
キーワード：・・・【ボール】

④ ボールぐるぐる
ボールの動き方を観察しよう。
キーワード：・・・【ボールの動き】

⑤ スペースシャトル
宇宙へ行くには、宇宙船が必要。
キーワード：・・・【宇宙船】

⑥ レインシャドウ
光の色や性質を観察しよう。
キーワード：・・・【光の色】

⑦ チェッカーテーブル
モノの性質を観察しよう。
キーワード：・・・【モノの性質】

しくみの部屋
英語
(A3)

Exhibition Room Main Attraction Map
Exhibition Room 3
"System & Mechanism"

The theme of this room is the "mechanisms of machines" that we are familiar with, and the various "systems of society" that support our daily lives.

1 The Workings of Piano
A piano with a transparent panel so that the inside is visible.
See how the parts move, and how they resonate when played.
Keywords: sound, vibration, piano

2 Mechanism of a Clock
Introducing how a clock works.
Let's see how a pendulum clock tick away the time.
Keywords: pendulum, clock

3 Underground Exploration
Let's take a look at the underground pathways for electricity, gas, and water that are essential for our daily lives.
※The sewage model shown here is a separated system for rainwater and waste water.
Keywords: water pipes, sewage pipes (rainwater pipes, waste pipes), electric wires, gas pipes

4 Electric Town
The model of a city lights up as you pedal your bike.
Let's work together as a trio to turn the lights on all over the city.
Keywords: power generation

自然の部屋
中国語
(A3)

展示厅 必看之处地图
西岛展示厅
自然之屋

这里主要介绍了以科学馆为中心的附近地域的自然环境。让我们一起来看常见的生物的另一面吧。

1 活体展示
VIVE这里我们可以看到科学馆附近河流中的鱼以及各种其他生物。
关键词：当地的自然环境、水边的生物

2 鱼的解剖标本
这里展示着用真正的鱼反制作的解剖标本。
关键词：解剖、鱼

3 标本·解剖
这里有着从家附近的鸟类和爬虫类等各种各样的生物制作的标本和模型。
关键词：解剖、鸟类、两栖·爬虫类、哺乳类、模型

4 树展示
以来自私人庭院的植物和季节性的活树，模拟出真实的生态环境。
关键词：当地的自然环境、大型成熟的生物

5 武藏野的杂木林
展示的是1950年代当时的地层模型。请仔细观察找出各种动植物种类。
关键词：武藏野、杂木林、鸟、昆虫

地球の部屋
韓国語
(A3)

전시실 볼거리 지도
전시실 5
지구 탐구방

지구 과학에 관한 설명, 표본의 관찰, 만들기 등을 할 수 있는 공간입니다. 암석이나 화석 표본을 직접 만져보거나, 관찰하며 지구과학을 공부하세요. 신기한 장소의 지질이, 커다란 지구의 일부분임을 실감할 수 있을 거예요.

1 지학입문 : 화석
화석은 아주 오래 상물의 흔적입니다. 과학을 관찰하면 아주 멋진 지구의 모습을 상상할 수 있습니다.
키워드 : 고대생물, 인화, 알갱, 표준 화석

2 지학입문 : 암석
지구의 구조, 암석의 사이클에 대해 핵심한 코너입니다. 견해적 : 인화석을 보세요. 견해석을 통해 보이는 그림은 두 그림이 어긋난 것처럼 보입니다. 도강 현미경 : 얇게 썬 암석에 빛을 통해, 강물의 순환, 크기, 모양을 알아보는 편이 가능합니다.
키워드 : 암석, 광물

3 화석을 채집하기 개요
다마동 승룡의 광반에서는, 300만년~125만년 전의 화석이 발견됩니다.
키워드 : 지질학, 환경변화

4 오쿠타마 산지의 지질
오쿠타마 산지에서는, 과거의 산호초나 바다 속에서 형성된 모래나 진흙의 사용을 관찰할 수 있습니다.
키워드 : 부가체, 판 구조론

5 무사시노 대지의 생물
무사시노 대지의 관동인도승 아래에는 시갈승이 있고, 사갈승에는 지학수가 풍부합니다. 관동 인도승이 많은 장소 등에서는 생물이 나오는 곳이 있습니다.
키워드 : 지학수

6 강변의 조약돌에서 산지의 지질을 알아보아요
강변에는 여러 종류의 조약돌이 있습니다. 이 조약돌들은 산지에서 운반되어 온 것입니다.
키워드 : 지갈

7 무사시노 대지의 관동 인도승
무사시노 대지의 대부분은 관동 인도승이라고 불리는 지층으로 덮여 있습니다. (※) 관동 인도승 지층은 판구조론이 겹쳐져 만들어진 것입니다.
키워드 : 화산재, 퇴적

3-2-3. 広報

1. イベント案内 チラシ①

配布日：2021年7月13日 発行部数：5,000部 仕様：A3 二つ折り(カラー)
 (表面) 9/26・12/5 やさしい日本語でプラネタリウムをたのしもう
 8/19・10/10 やさしい日本語で黒目川の魚を観察しよう
 (中面) 多文化共生プロジェクト関連イベントの年間スケジュール
 イベントのためにはじめて来館する方を想定し、中面右ページは当館の概要と展示室を紹介した。



4. 地域在住外国人向けの特別プログラムの 企画開発・実践・評価

4-1. やさしい日本語でプラネタリウムをたのしもう

開催場所:多摩六都科学館 サイエンスエッグ

第1回

開催日時:2021年9月26日(日)17:30~18:30

参加者:小学生以上の方 66人(ほかに関係者等7人)

参加者の繋がりのある国:日本のほかに中国、韓国、スリランカ、ベトナムなど

解説:成瀬裕子(多摩六都科学館 天文グループ)

第2回

開催日時:2021年12月5日(日)17:30~18:30

参加者:小学生以上の方 38人(ほかに視察10人、関係者2人、スタッフ3人)

参加者の繋がりのある国:日本のほかに中国、アメリカ、スウェーデン、フィリピンなど

解説:成瀬裕子(多摩六都科学館 天文グループ)

1. 参加者について

昨年度までと大きく異なるのは、対象者を「小学生以上の方」とし、「海外にルーツをもつ方とその家族」に限定しなかったことである。

応募状況は第1回が30組中12組、第2回は19組中12組が「海外にルーツをもつ方とその家族」である。

第1回(9月)は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で定員を80人とし、72人の応募があった。この回は大人の参加が半数を超えた。日本語学校から「学生(大人)ひとりでも参加できるか」という問い合わせがあった。母国に帰ることができず、外出にも制限がある状況で、学生たちの楽しみが少ないのでイベントの案内をしたいとのことだった。当日は学生と思われる参加者がみられた。

第2回(12月)は、前回同様80人の定員に対し応募は56人だった。この回は家族参加がほとんどで、今年度開催した多文化共生プロジェクトの他のプログラムに参加したりピーターも複数見られた。新型コロナウイルス新規感染者数の再増加期にあたり、その影響によるキャンセルが多数発生したが、多文化共生関係者の視察を多く受け入れた。

各回共通して圏域5市だけでなく、中央線沿線や23区からの参加者が昨年度より増えた。

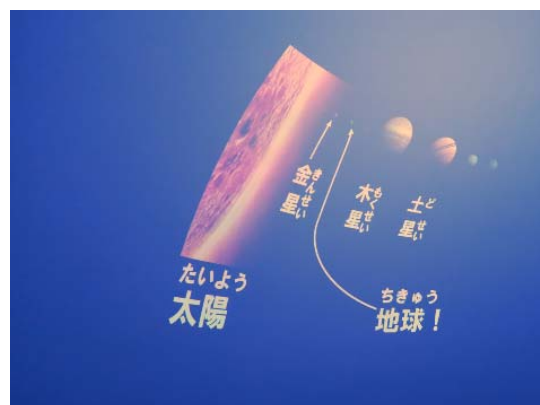
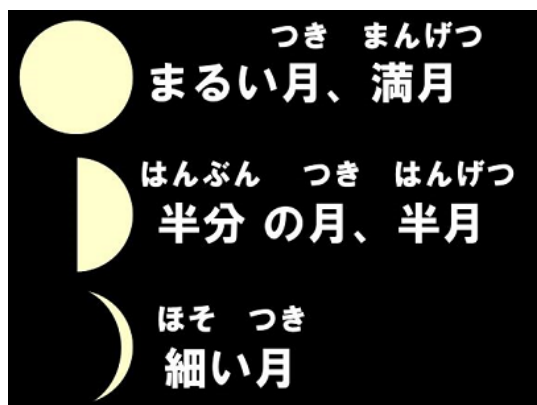
2. 内容

(1)やさしい日本語の紹介

冒頭に、解説員がこのプログラム内で「やさしい日本語」を使う意義について説明を行った。

(2)プラネタリウムの解説で用いる「やさしい日本語」の事前説明

下は実際にドームに投映された画像である。誰にでもわかりやすく言い換えた例で、漢字にはルビが振ってある。できるだけ簡潔な表現で、ゆっくり、はっきり、重要な言葉は繰り返して伝える。



Credit: The International Astronomical Union/Martin Kornmesser

(3)冬の星空案内

星を探す手掛かりとなる方角や星の名称、明るさなど、理解しやすいようにやさしい日本語で説明を行った。終盤には、参加者に事前に調べてもらった様々な言語の「星」を意味する言葉を、満天の星空に重ねて投影する演出を行った。

また、「イベント後に実際の星空も見上げてほしい」と願うスタッフの発案により、第2回のイベント時には「冬の星空案内」のプリントをやさしい日本語で作成し、投影後に配布を行った。

(4)宇宙旅行

銀河への宇宙旅行がテーマの映像を鑑賞。第1回には、当館のキャラクター「ペガロク」が登場し解説者と会話で進行するパートがあったが、方言のような「～ペガ☆」という独特な語尾で話すののために分かりにくいとのコメントがあり、第2回はペガロクとの会話は省き、シンプルに映像を楽しめる構成に変更した。

3. アンケートより

- やさしい日本語で聞いたから、本当に助かりました。わかりやすかったです。(参加者・大人)
- 外国語を話す人だけでなく、小学校低学年にも必要。(参加者・大人)
- 専門用語がほとんどなくても宇宙のことが伝えられることに素直な感動を覚えた。同様の取り組みが自館でも可能なのではないかと希望を持つことができた。(関係者)
- プラネタリウムをスタートする前に、やさしい日本語のプログラムを実施するにあたっての思いを話されたのが良かったです。練習問題も工夫されているなど感じました。そして、プログラムの中身が壮大で良かったです。少々の違いを気にしている場合でないという気持ちになりました。科学館や博物館に足を運ぶ良いきっかけになると思います。(関係者)



4. 所感

やさしい日本語でのイベントだから参加した在住外国人参加者から、「仕事をしている配偶者や子どもは外に出る機会が多いが、自分は日本語に自信がないため家に籠りがちである。また子どもの年齢とともに日本語の習熟度が上がると取り残されたような気持になる」という話を伺った。今回のプラネタリウムは内容がわかり家族で同じ体験を共有できた喜びで非常に明るい表情だったのが印象に残った。

「やさしい日本語でプラネタリウムをたのしもう」のリピーターが出てきたことから、今後はリピーター向けの番組作りについても検討を行っていく。

(イベント動画のURL <https://youtu.be/nMUL8Lvb1D0>)



4-2. やさしい日本語で黒目川の魚を観察しよう

観察場所：東久留米市 小山れんげ公園の近くの黒目川

第1回

開催日時：2021年8月19日(木)13:00~15:00

参加者：小学1年生~小学5年生とその保護者 10組20人

参加者の繋がりのある国：日本のほかに中国、アメリカ、フランス、ドイツなど

第2回

開催日時：2021年10月10日(日)13:00~15:00

参加者：小学1年生~小学4年生とその保護者 10組20人

参加者の繋がりのある国：日本のほかに中国、韓国、アメリカ、タイなど

講師：豊福正己氏(東久留米ほとけどじょうを守る会)

小松原昌男氏、竹内秀夫氏(ともに東久留米川クラブ)

北村沙知子(多摩六都科学館 研究交流グループ)

制作：武蔵野美術大学 芸術文化学科

(観察ガイドブック：井富有音氏、梨本奈那氏、長谷川華蓮氏)

(ドキュメンタリー映像：石崎美智氏、鈴木藍氏)

監修：杉浦幸子氏(武蔵野美術大学芸術文化学科 教授)

米徳信一氏(武蔵野美術大学芸術文化学科 教授)

多摩六都科学館ではこれまでも東久留米ほとけどじょうを守る会の豊福氏とともに東久留米の川での観察会を行ってきたが、今年度は「やさしい日本語」での実施にチャレンジすることとなった。さらに小平市にある武蔵野美術大学芸術文化学科の協力のもと、観察ガイドブックのやさしい日本語版と英語版、および記録映像を制作した。

1. 参加者について

対象は「海外にルーツをもつ方とその家族」に限定せず、小学1年生から中学生とその保護者を各日10組20人募集した。多摩六都科学館の隔月広報物「ロクトニュース」(発行部数20万部)に情報が掲載されたこと、さらに夏休みまたは祝日の開催だったため、応募状況は第1回が144組第2回は61組と高い倍率となり、そのうち日常的に日本語以外の言語を話している人は第1回が11組、第2回は10組だった。



2. 内容

(1) 川での活動

東久留米駅から観察場所までは徒歩約10分。大人も子どもも緊張気味であったが、スタッフと話すうちに、だんだんとリラックスしてきたように見えた。

3もしくは4組を1グループとし、外国にルーツをもつ子どもたちがすべてのグループに入る編成で活動を行った。魚と触れ合う、川に入るといった体験がはじめてという子どもが多かったようだが、保護者やスタッフのサポートがあり、安心して挑戦することができたことがアンケートから伺える。

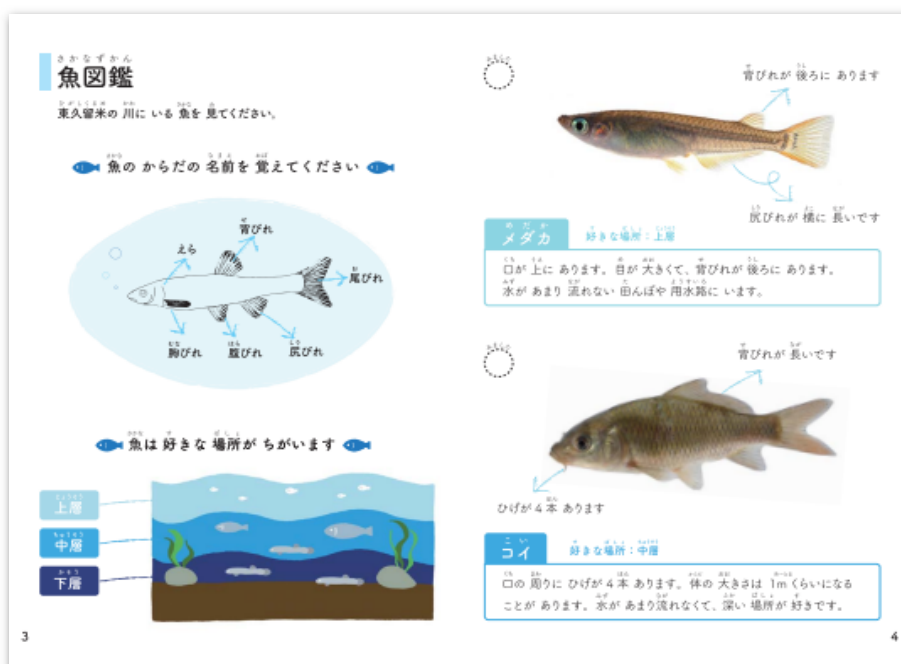


(2) 魚の観察

川から上がって、捕まえた魚を細長い観察用水槽に移して観察する。容器の中では魚が動かないので、長さや特徴をじっくりと見ることができる。この際に活用したのが「観察ガイドブック 東久留米の川の魚と仲良くなろう」である(8月は、やさしい日本語版のみ)。

3. 「観察ガイドブック 東久留米の川の魚と仲良くなろう」の制作

観察ガイドブック制作プロジェクトの始動は4月。講師の豊福正己氏監修のもと、武蔵野美術大学 芸術文化学科のみなさんとともに進められた。学生の井富有音氏、梨本奈那氏、長谷川華蓮氏が制作を担当し、東久留米の川や魚について調べたうえで、どうしたら参加者にわかりやすく伝えられるか、一緒に考え、形にしていっていった。



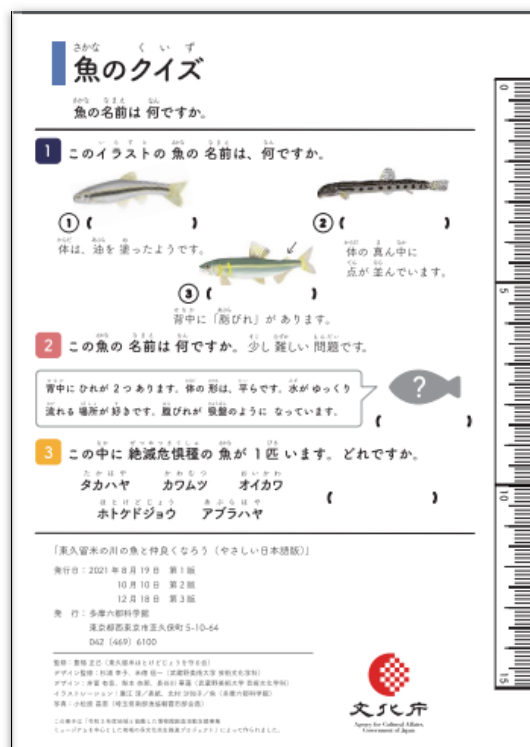
魚の名前と生息している場所が特徴とともに紹介されているので、イベント終了時には「魚」ではなく、「ホトケドジョウがいた」などの名前を言えるほど詳しくなった。

8月に使用した冊子は、アンケートの声や製作スタッフの意見を反映しながら改良を行った。

10月に使用したバージョンには、見つけた魚を判別するシール欄が追加された。より多くの魚種を見つけるのが楽しくなる仕掛けである。また裏表紙に定規の目盛りを入れることで、すぐに魚の長さが測定できるように改良された。

10月には英語版も制作され、希望する2人の参加者が実際に使用し多様なニーズに応えることができた。

ドキュメンタリー映像については同じく武蔵野美術大学 芸術文化学科の石崎美智氏、鈴木藍氏が撮影と編集を担当。講師と一緒に子どもたちが東久留米の川の魚と仲良くなっていく様子や、やさしい日本語での説明の意味、ガイドブック制作の裏側など、この協働の全体像も伝えている。



4. アンケートより

- 黒目川に魚がたくさんいることを、はじめて知ってびっくりしました。(参加者・子ども)
- いろいろな生きものに触れ合えて楽しかった。(参加者・子ども)
- かなり本格的に入った魚とりで、やり方も安全管理もたくさんの人にサポートされ、とても充実した体験でした。(参加者・大人)
- 先生がいなかったらできなかったです。(参加者・大人)
- Very good: Please keep doing this activity. (参加者・大人)

5. 所感

川の魚の観察は、川に入る活動であるため安全に細心の注意を払って行われた。特に8月は、参加への案内文で暑さ対策などがしっかりと伝わるよう工夫をした。

多摩六都科学館のイベントの中でも特に人気の高い自然観察プログラムであるが、コロナウィルスの影響で来日以降、出かけることができずいたというタイ人の男性や、「家族(日本人の配偶者)に薦められて」と渋々参加されていたアメリカ人の男性も参加していた。この方場合は心配で奥様が現地までついてきたが、こういった方々が地域に出て、コミュニティーを広げるためにも「やさしい日本語」でのイベントがあってよかったと思う。

制作された冊子は、東久留米ほとけどじょうを守る会が市内の小学校で出張授業を行う際に教材として使う予定である。低学年にも理解しやすいと好評を得ている。

(武蔵野美術大学 芸術文化学科制作によるイベント動画のURL

<https://youtu.be/rk-k-Pgq1IE>)



4-3. キッチンで カラーマジック実験 ～身近なものの性質を調べよう～

開催場所:多摩六都科学館 科学学習室

開催日時:2021年11月28日(日)①11:00～12:30 ②14:00～15:30

参加者:YSCグローバル・スクールのみなさんを含む、外国に繋がりのある小学5年生以上 ①12人 ②11人

参加者の繋がりのある国:日本のほかに中国、韓国、ネパール、ベトナム、エジプト、アメリカなど

講師:平野 亜弥先生(YSCグローバルスクール)、筋野 美穂(多摩六都科学館 研究交流グループ)

やさしい日本語を用いた新たなプログラムとして、学習単位につながる実験教室を開催した。テーマは小学6年理科の単元「水溶液の性質」とし、「身近なものの特徴を知ること」を目的とした。

1. 参加者について

対象は外国に繋がりのある小学4年生から中学3年生とし、一般参加者とYSCグローバル・スクールのグループが同じ授業を受けた。多摩六都科学館の通常の教室でも参加が少なくなる中・高学年以上を集めることは難しいかと思われたが、上記参加者のうち一般参加者は①は2人、②は3人だった。

NPO法人 青少年自立支援団体YSCグローバル・スクール

WEBサイト: <https://www.kodomo-nihongo.com/index.html>

NPO法人青少年自立援助センター(設立1999年6月)が運営する、海外にルーツを持つ子どもと若者のための、専門的教育支援事業の名称。

2010年度より東京都福生市を拠点として、数十カ国にルーツを持つ6才～30代の子ども・若者たちを年間100人以上受け入れている。

2. プログラムの構成

① 同じように見える水溶液の違いを知り、調べる

見た目は透明な水溶液にBTB溶液を加えると色が変わり、この色の違いによって酸性・中性・アルカリ性という水溶液の性質を判別できることを実験で確かめた。10個のサンプル(食塩水・砂糖水・石鹼水・レモン汁など)に、1つひとつにBTB溶液を加えていった。



参加者は各自集中して作業していたため、誰も話をしなかった。BTB溶液の使用や理科の実験そのものがはじめてという参加者もいた。

参加者が自宅から持ってきたジュースや調味料、洗剤でも実験を行った。コーラなどのように色が濃くてBTB溶液で調べるのが難しい場合は、pH試験紙を用いて性質の判定を行った。



各自の実験結果で得られた水溶液の性質を、付箋に書いて、ホワイトボードに貼って全員で確認した。



3. アンケートより

- 今日の実験のことに1回読んだことがあります。でもこの実験をしたことがないのでおもしろかったです。
- もう知っていることもあったけど、実験をしたことでより一層分かるようになりました。説明もわかりやすかったです。
- 実験をするのが楽しい！
- 性質のことがわかった。とてもたのしいです。
- It was good to learn new science information.

4. 所感

薬品を用いた実験だったが、事故なく終えることができた。今回の対象年齢は適切であり、これより年齢が低いと対応が難しいと考えられる。

講師の指示が分からない参加者がいた。スタッフのフォローと講師が適宜補足したが、これらのプログラムの場合は応募時に日本語のレベルを聞いたほうがよいことがわかった。通学先、通学期間、過程で使用している言語、日本語による指示の理解度などの質問によってレベルを推測することができる。

冒頭に参加者の緊張をほぐすためのアイスブレイクの時間を設けなかったことも今回の反省点のひとつである。またYSCのグループが参加していることも併せて紹介し、同じ言語を話す参加者の席を近くに配置すれば自然と話す機会ができたと考えられる。

YSC関係者からは、「設備等の都合もあり、なかなか実施が難しい理科の実験を体験することができた。教室で学習しているが参加者の表情が違った」とのコメントがあった。この実験教室は、SDGsで掲げる「質の高い教育をみんなに」を体現している。今後も多摩六都科学館でできる多文化共生とは何かを考えていきたい。

(イベント動画のURL <https://youtu.be/tyoDuuHUGdE>)



おわりに

多摩六都科学館では、平成31年度から令和3年度まで文化庁の文化芸術振興費補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」の助成を受け、「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生プロジェクト」を実施してきました。

科学館とは言え地域の公的文化活動を支援する一つの施設でもある多摩六都科学館で、このようなプロジェクトを立ち上げた背景と目的に関しては、刊行された「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生プロジェクト報告書」の「はじめに」に述べられています。

プロジェクトが実施した該当年の調査結果と事業活動は、各年の「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生プロジェクト報告書」に記載された通りですが、本プロジェクトの活動を通じて、多摩六都科学館スタッフの多文化共生社会の市民としての意識の醸成と地域での市民活動推進者との連携は、ようやく始まったところであることにも気づかされます。その意味では、今回、始まった多摩六都科学館と地域での市民活動を推進する組織との連携を維持し、促進する活動のさらなる継続が強く望まれます。

多摩六都科学館の様な地域での公的文化施設は、地域に根差した市民と共有できる活動の推進が不可欠であることを配慮すると、文化庁の文化芸術振興費補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」の助成を受けて始めた「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生プロジェクト」が、一過性のプロジェクトで終わらないような体制づくりが必要であること、さらには本活動をより多くの博物館関係者に広める必要性にも気づかされます。

本プロジェクトで試みた、「やさしい日本語」がもたらす科学館の多文化共生の可能性を探る多摩六都科学館で職員研修など、具体的な試みで手に入れた体験などを活かして、文化庁からの支援事業助成終了後も、多摩六都科学館では本プロジェクトを可能な範囲で続けて行きたいと願っています。

令和4年3月15日

多摩六都科学館
館長 高柳雄一

多摩六都科学館「多文化共生推進プロジェクト」のレガシーに期待を寄せて

NPO 法人西東京市多文化共生センター代表理事 山辺真理子

世界最大級のプラネタリウムドームを持つ多摩六都科学館は、西東京市をはじめとするこの地域に住む人たちにとってランドマーク的な施設である。その科学館から、地域在住外国人を視野に入れた多文化共生の取り組みを進めたいとお声掛けいただいた時は小躍りしたいほどだった。

この3年間、様々な取り組みを着実に進められたが、在住外国人の近くで活動する者にとって、特に評価したいのは、言語の壁を低くして多様な人々が楽しく学べる環境を整えられたことである。

年少者対象の「ピッケの絵本」作り、各種実験や観察教室、やさしい日本語の解説で楽しむプラネタリウムなどのプログラムに加えて、やさしい日本語での来館者対応が進められたことは、今後に残る成果だろう。

また、それらの取り組みに地域の教育機関や団体等を巻き込み、その成果を東京都や全国規模のシンポジウムなどで発信されてきたことは、他地域の多文化共生推進への貢献にもなったと思う。

多文化共生推進のコア機関としての多摩六都科学館の役割に期待

武蔵野大学グローバル学部 教授 村澤慶昭

日本語非母語話者に対する災害時の緊急情報伝達を見直すことから生まれた「やさしい日本語」は、送り手の「伝える」から受け手の「伝わる」への視点の移行を促した。これは教育における「教える」から「学ぶ」への視点移行と同様である。ゆえに、災害情報や地域行政の発信、生活情報の支援のみならず、本事業のように科学に触れる分野において「やさしい日本語」の視点が導入されたのは、非常に意味深い。「伝わる」が「わかる」に変じるとき、そこに知的好奇心が働けばよりよい「学び」が生まれる。それは、決して内容の“易しさ”ではない。多文化共生推進のために本事業が行ってきた様々なチャレンジやプログラムは、まさに、その知的好奇心の刺激・提供を地域に根ざして行っている点に意義があり、それは本科学館の存在意義でもあろう。生物の多様性と同様、人・文化の多様性の観点からそれらを“化学反応”させるコア機関としての役割が今後も期待される。

従来の博物館の概念を越えて、新たなミュージアムへ

ICOM-CAMOC 理事 邱君妮

社会のためのミュージアムとは何か。この問いかけは、ミュージアム関係者にとっては重要かつ普遍的なものであり、私たちは日常業務に追われながらも、社会的役割を果たすための多様な

活動を推進することが求められている。

その答えの一つが、多文化共生であろう。多摩六都科学館のような地域社会に密着しているミュージアムは、従来の伝統的な概念からは指定管理者が運営するサイエンスセンターにほかならないが、同館が実践している多文化共生に向けた活動は、館のカテゴリーや運営体制とは関係なく、More local, more global というビジョンを有するミュージアムの現場とそれを支える地域の有識者が団結した取り組みであり、他のミュージアムにも一つの重要なヒントを与えているのではないだろうか。

同館が ICOM-CAMOC (国際博物館会議都市博物館国際委員会)において国際的に評価されたのも、サイエンスセンターを越えて、ミュージアムによって人が変わり、社会を変える力を見せたことの証左であろう。今後の多摩六都科学館の活動の展開に大いに期待したい。

ユニバーサルな「ロクト」を目指して

YSC グローバル・スクール 多文化コーディネーター ピッチフォード 理絵

今年度多文化共生事業は大きな成果を残すことができました。日本語力が不足している海外につながる子どもたちにとって科学館は興味関心があっても敷居が高く、また子どもに十分な日本語力があっても保護者の日本語力によっては十分な情報を得ることが難しくなりますが、今年度はプログラムの周知が進み参加希望者が増えました。子どもと共に科学学習体験への参加を望む保護者も多く、観察教室では親子参加者の笑顔が印象的でした。「キッチンでカラーマジック」という身近な体験により物質の性質を学んだ実験教室は参加者に大きな印象を残しました。プラネタリウム、観察教室、実験教室と「外国人児童生徒向け」に丁寧な準備をしたうえでの開催でしたが、いつでも、どのプログラムでも海外につながる子どもたちが体験と学びを楽しむことができる、誰にでも開かれたユニバーサルな多摩六都科学館を目指して次年度以降も歩みを止めないことを願います。

意思(石)の上にも3年

多摩六都科学館 統括マネージャー 廣澤公太郎

多文化共生プロジェクトに取り組んで3年。当館では、日本語を母語としないユーザーのためプラネタリウム番組や観察・実験体験のプログラムサービスを用意し、解説やファシリテーション役のスタッフに意識付けを重視した研修も実施。科学館ニュースやチラシなどを用意し万全の広報を行った。各市の福祉系施設やグループへも情報提供。そして1年目、プラネタリウム番組の参加者は想定外の6名であった。この結果から学んだことは、外国語を母語にする方々にとっては、そもそもその地域の行事や公共施設の使い方に関する情報の伝達路が見つけられず、また見つかってもそれがどういうイベントなのか、また自分にマッチングするものかの判断も困難であり、通常のインフォメーションでは届きにくいことであった。届けるには3年、打率は低くともどこに打つのかを定め、広報の継続が大切と実感した。これを契機に本プロジェクトを科学館の継続的な根幹の取り組みとする。

事務局スタッフコメント

災害時にやさしい日本語を使うことの重要性は分かっていたのですが、プロジェクト一年目に、やさしい日本語の講習を受け、当館の広報、利用案内をやさしい日本語で表現することの難しさを思い知りました。日本語が苦手な方々が楽しむためのイベントを企画しているのに、その告知がわかりにくくては参加の意欲を申込段階で削いでしまうことになってしまいます。苦勞しながらもやさしい日本語脳が少しずつできてきました。プロジェクトを進める中で、科学館としての役割は、在住外国人の方の困りごとの解決ではなく、日々の生活に彩をもたらす場所となることだと学ぶことができ、それを目標にこれからも科学館の事業に反映していきたいと思っています。(安倍)

主に広報担当としてこのプロジェクトに携わりました。科学館からの情報を、どうしたら必要な人たちに届けることができるのか。まったく分からない時点からのスタートでした。試行錯誤を繰り返しながら多摩六都科学館構成市や国際交流協会等で活動されるみなさまと繋がり、多くのことを学ばせていただいたことに感謝いたします。

研修を経てスタッフの意識が変わったことは、実施後のアンケートのコメントから明らかです。また、多言語版での教材や情報発信も増えました。ツールとして「やさしい日本語」を得た多摩六都科学館が、これからも継続して開かれた場所としていられるよう、微力ながらも貢献できたらと思っています。(蓮田)

科学館は主に「来られた方に科学を手渡す場」であり、まだ来ていない方、来たくても来られない方、科学館の存在を知らない方への接触はなかなか難しい。しかし科学に触れる機会は万人が享受できるべきで、その妨げを緩和することは社会教育施設の使命であり、チャンスともなる。未・来館者にどうアプローチすべきかと歯痒かった自分には、“やさしい日本語”での事業はまさに欲したものだった。

プラネタリウム解説員は「老若男女にわかりやすい日本語音声解説」に日々向き合う人々である。そして地球のどこでも共有できるのが空を見る愉しみである。日本のプラネタリウムは百を優に超える。やさしい日本語×天文の取り組みが広まる期待を感じている。(成瀬)

当館の第2次基本計画ローリングプランで「ソーシャル・インクルージョン」という言葉に出会いました。科学館として、また地域の一市民として社会課題に如何に向き合うのか。地域の在住外国人たちは当館を利用しているのだろうか？という問いから本プロジェクトを構想し、2019年に始動しました。多文化共生の現状を先進事例や実践者から学び、そして、幸いにも多くの方々の支援を得ながら展開することができました。Laura-Edythe Colemanは著書“Understanding and Implementing Inclusion in Museums”の中で、博物館にとっての社会的包摂を“*The process by which museums combat social exclusion through cultural, social, political, and economic means*”と定義しています。これからも博物館という場を活かした多文化共生の実現に向けて、長いプロセスを歩む覚悟を肝に銘じたいと思います。最後になりましたが、本プロジェクトに関わってくださった全ての皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。(高尾)

令和3年度文化庁文化芸術振興費補助金
「地域と共働した博物館創造活動支援事業」

ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト報告書

2022年3月31日 印刷

2022年3月31日 発行

編集兼発行者

たまろくミュージアム多文化共生推進実行委員会
(多摩六都科学館)

〒188-0014 東京都西東京市芝久保町 5-10-64

電話 042-469-6100